

み　た　ち 三太刀遺跡(Ⅲ)

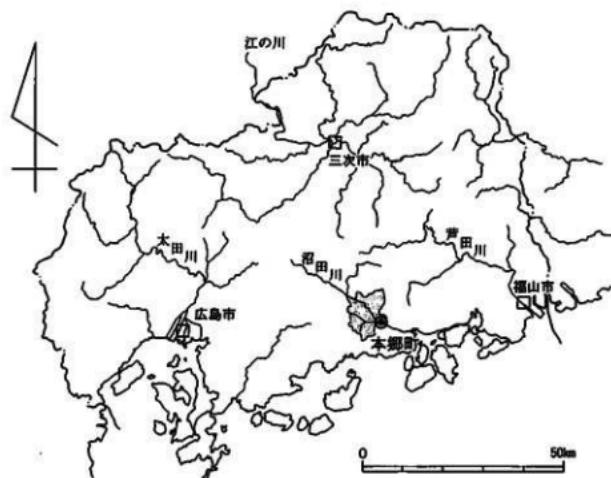
東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

2005

財団法人 広島県教育事業団

三太刀遺跡(Ⅲ)

東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（4）



本郷町位置図（◎は遺跡を示す。）

2005

財団法人 広島県教育事業団

例　　言

1. 本書は、平成15（2003）年度に実施した東本通土地区画整理事業に係る三太刀遺跡（豊田郡本郷町大字本郷所在）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、本郷町との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
3. 発掘調査は梅本健治、山田繁樹が担当した。
4. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、梅本が中心となって行った。
5. 本書は、梅本が執筆・編集した。
6. 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑，SD：溝状遺構，SX：性格不明の遺構，P：柱穴
7. 土器の断面については、須恵器は黒ヌリ、そのほかは白ヌキである。
8. 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
9. 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
10. 第1図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（三原・垣内・河内・竹原）を使用した。

目 次

I	はじめに.....	(1)
II	位置と環境.....	(2)
III	調査の概要.....	(6)
IV	遺構と遺物.....	(8)
V	まとめ.....	(33)

挿図目次

第1図	三太刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(3)
第2図	周辺地形図 (1:2,000).....	(7)
第3図	遺構配置図 (1:200).....	(9)
第4図	F区SK1実測図 (1:40)	(10)
第5図	F区SX1・SX2実測図 (1:60)	(10)
第6図	F区出土遺物実測図 (1:2, 1:3, 1:4).....	(11)
第7図	G区下段平坦面遺構実測図 (1:60)	(13)
第8図	G区西壁土層断面図 (1:60)	(14)
第9図	G区SE1実測図 (1:40)	(16)
第10図	G区土坑実測図 (1) (1:40).....	(17)
第11図	G区出土遺物実測図 (1) (1:2, 1:3)	(21)
第12図	G区出土遺物実測図 (2) (1:3)	(22)
第13図	G区土坑実測図 (2) (1:40).....	(27)
第14図	G区土坑実測図 (3) (1:40).....	(28)
第15図	G区柱穴実測図 (1:30, 1:60).....	(28)
第16図	G区出土遺物実測図 (3) (1:2, 1:3)	(30)

表 目 次

第1表 遺構一覧表.....	(31)
第2表 遺物一覧表.....	(32)

図版目次

図版 1	a 遺跡遠景（東から）	図版 5	a 全景（調査前、北東から）
	b F区全景（調査後、 北西から）		b 上段平坦面中央完掘状況 (西から)
	c 同 上（南東から）		c 下段平坦面完掘状況（東から）
[F区]			d SE 1 直上土層（東から）
図版 2	a 全景（調査前、北西から）		e SK 2（東から）
	b 遺構検出状況（北西から）		f SK 3（北から）
	c 西壁土層（南東から）		g SD 1 土器出土状況（南から）
	d SK 1・SX 1（南から）		h 作業風景（下段平坦面、南から）
	e SK 1 土層（南から）	図版 6	a SK 4（東から）
	f SX 1 遺物出土状況 (南から)		b SK 4 土層（東から）
	g SX 2（南西から）		c SK 6（東から）
	h 作業風景（北西から）		d SK 6 土層（西から）
[G区]			e SK 7（北から）
図版 3	a 全景（調査後、西から）		f SK 7 土層（北から）
	b 同上（調査後、東から）		g SK 8（西から）
	c 西壁土層（東から）		h SK 9（東から）
図版 4	a 下段平坦面完掘状況 (北から)	図版 7	a SK 10（西から）
	b SE 1（東から）		b SK 11（東から）
	c 同 上		c SK 12（東から）
			d SK 11・SK 12 土層（東から）
			e SK 13 桶検出状況（南から）
			f SK 13 土層（東から）
			g SK 13 完掘状況（東から）

- | | | |
|-----|-----------------------|----------------|
| | h SK14 (南から) | e P 5 根石 (東から) |
| 図版8 | a SK15 (北から) | f P 6 土層 (東から) |
| | b SK15土層 (東から) | g P 7 (南から) |
| | c P 4 土器出土状況
(東から) | h P 8 (東から) |
| | d P 5 土層 (東から) | 図版9 出土遺物 (1) |
| | | 図版10 出土遺物 (2) |

I はじめに

三太刀遺跡の発掘調査は東本通土地区画整理事業に係るものである。本事業は、広島空港や一般国道2号など空陸の交通条件に恵まれ、利便性の高い本郷町市街東郊の東本通地区において、急速な宅地化に伴う防災面など様々な問題が想定されるなかで、先行的な都市基盤整備や土地利用の増進を図り、ひいては広島県の空の玄関口に相応しい町づくりを進めようとするものである。

本郷町（都市計画課）は、平成5（1993）年7月20日、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、本郷町教育委員会（以下、「町教委」という。）と協議した。町教委と広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）はこれを受けて現地踏査を行い、同年12月町教委から本郷町に、事業地内に試掘調査が必要な箇所が1か所（周知の遺跡である三太刀遺跡・三太刀城跡・みたち古墳群が存在する三太刀山及び周辺全体）存在する旨を回答した。これらのうち、三太刀遺跡の大字本郷3817-1, 3818, 3819, 3820-2, 3824, 3825-1, 3825-2, 3827, 3828, 3830, 3870（A～D区・1,865m²）を平成12（2000）年度、大字本郷3833, 3834, 3835, 3836-2（E区・812m²）を平成14（2002）年度、そしてみたち第2・3号古墳を平成13（2001）年度にそれぞれ発掘調査した。今回の調査区（F・G区）のうち、F区（大字本郷666, 668-1, 669-1, 3853, 3866-1=180m²）は平成14（2002）年11月、G区（大字本郷3851=380m²）は平成13（2001）年11月にそれぞれ試掘調査を実施して遺跡を確認した旨をF区は平成15（2003）年1月14日、G区は平成14（2002）年2月18日に本郷町に回答した。これの遺跡の取扱いについて県教委、町教委及び本郷町は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。その後、本郷町はF区が平成15年1月28日、G区は平成16（2004）年1月5日付けで、「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を県教委あてに提出し、県教委はF区が平成15年2月17日、G区は平成16年1月5日付けで本郷町あてに、工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。本郷町はこれを受けて、平成15年12月19日付けでF区の、平成16年1月14日付けでG区の調査依頼を財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下、「教育事業団」という。）に行なった。本郷町と教育事業団は平成15年5月30日付けで委託契約を結び、教育事業団は平成16年1月13日から3月5日までの約2か月間発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、本郷町都市計画課、本郷町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

三太刀遺跡が所在する豊田郡本郷町は、広島県中央部の瀬戸内沿岸の沼田川河口に開けた町である。町域北部を北西から南東方向に流れる沼田川とこれに南方から流入する尾原川沿いに狭小な谷底平野がみられるものの、町城の大半は標高100~400m台の低丘陵が占めている。三太刀遺跡はこのような本郷町東端の、沼田川北岸の氾濫原に起因する平野の一角に存在する。

安芸国と備後国の国境に位置する本郷町は町域の中央を旧山陽道が通り、瀬戸内海まで10kmと至近距離にある海陸両方の交通の便に恵まれた町である。そのため、古来政治的、社会的に要衝の地として栄え、尾原川沿いの巨石墳や中世小早川氏の史跡高山城跡に代表される多くの文化財を残している。ここでは、調査された遺跡を中心に本郷町と三原市西部の歴史的環境について触れることにする。

旧石器時代 沼田川河口から3kmほどの瀬戸内海に浮かぶ小島宿^{すく}島で採集された頁岩製の搔器などがある。

縄文時代 この時代の遺跡は三原湾岸や沼田川下流域に点在するが、多くは遺物の採集例で調査例は少ない。早期の遺跡は海浜に面した標高10~20mの丘陵上に立地するが、後・晩期になると低地を望む丘陵の裾部に遺跡が立地するようになる。沼田川下流域の後期の遺跡としては、本郷町広国^{ひろくに}遺跡、同宮地川遺跡、同片山遺跡がある。広国遺跡では土地改良事業に伴って発掘調査が実施され、1~2m大の不整形土坑などから後期初頭の鉢形・深鉢形土器や安山岩製のスクレイパーが出土している。

弥生時代 前・中期の様子はよく分からぬが、後期の遺跡では本郷町陣べら遺跡群や同舟木遺跡⁽³⁾がある。陣べら遺跡群は沼田川西岸の丘陵端部の尾根上に立地し、竪穴住居跡や墓坑群を検出している。竪穴住居跡2軒は平面形隅丸方形・方形、4~8本柱の弥生時代後期後半のものである。墓坑群は8m×10mの範囲に土坑墓・木棺墓・壺棺墓計13基が密集して営まれ、共同墓地的様相を呈している。舟木遺跡は径約3mの円墳状の積石を伴う、弥生時代後期の壺棺墓である。また、遺構には伴わないものの、横見麻寺跡下層出土土器群・陣開第3号古墳前面包含層出土土器群⁽⁴⁾は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのまとまった資料である。壺などの在地的様相を示す土器群のほかに、タタキをもつ畿内第V様式の甕の一群を含み、当地域と畿内地域との密接な交流を示すものとみられる。

古墳時代 この時代の遺跡は大半が古墳で、集落跡・生産遺跡などの様相は明らかでない。古墳の多くは尾原川两岸や沼田川南岸の丘陵上や山麓に分布する。概ね、丘陵上には箱式石棺・木棺直葬・粘土模など竪穴系の埋葬施設をもつ古墳が立地し、丘陵裾には横穴式石室をもつ古墳がみられる。前者は数基から10基程度、後者は2、3基から数基程度が群集する例が多い。



第1図 三太刀遺跡周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 三太刀遺跡
- 2 みたち古墳群
- 3 宮ノ谷第8号古墳
- 4 錢神古墳群
- 5 滝箭古墳
- 6 福礼古墳
- 7 高木山城跡
- 8 史跡横見庵寺跡・宮地川遺跡
- 9 県史跡梅木平古墳
- 10 犬造屋迫第4号古墳・宮地川経塚
- 11 脇べら遺跡群
- 12 西野田経塚
- 13 史跡新高山城跡
- 14 史跡高山城跡
- 15 規沙門山下遺跡

前期の古墳としては、本郷町鍛冶屋^{かじや}追第4号古墳・三原市宮ノ谷第8号古墳がある。鍛冶屋追第4号古墳（4世紀末～5世紀初頭）は全長21mの小型の前方後円墳で、後円部頂上の箱式石棺から中国・三国時代の画文帶神獸鏡や勾玉が出土した。宮ノ谷第8号古墳（4世紀後半）は径10mの円墳で、木棺内から內行花文鏡・鉄矛・刀子・管玉が、棺外から鉄刀・鉄斧・土師器などが出土している。

中期の古墳には三原市場岡第1号古墳、同県史跡兜山古墳などがある。鳩岡第1号古墳（5世紀）は径36.5mの大型の円墳で、粘土塚を埋葬施設とする。墳丘には形象埴輪・円筒埴輪がめぐる。兜山古墳（5世紀後半）は径45mの県内最大級の円墳で、北側に方形の造り出しがある。墳頂部と墳裾部に二重に円筒埴輪列がめぐらされ、形象埴輪片も採集されている。埋葬施設は不明である。三太刀遺跡のすぐ西側の丘陵上にある本郷町みたち第2号古墳（5世紀末～6世紀初頭）は径12mの円墳で、堅穴系の埋葬施設をもつとされている。須恵器・鉄刀・鉄鎌・玉類・耳環のほかに金銅製の冠片が出土し、墳裾には円筒埴輪列がみられた。

後期の6世紀後半以降多くみられる横穴式石室をもつ古墳としては、本郷町みたち第3号古墳⁽⁷⁾、同陣開古墳群⁽⁸⁾（4基）、同金壳古墳群⁽⁹⁾（2基）、三原市鍛神古墳群⁽¹⁰⁾（5基）などがある。みたち第3号古墳（6世紀後半）は第2号古墳の西側背後にある古墳で、片袖の石室から土師器・須恵器・鉄鎌・玉類・耳環のほかに製塙土器が、また周溝外から装飾須恵器（台付壺）が出土した。沼田川西岸の陣開古墳群（6世紀後半～7世紀）は、第3号古墳の石室から鉄刀・鐸・刀子・鉄釘が、第4号古墳の石室からは須恵器（杯蓋・杯身・壠・提瓶）、刀子、石製紡錘車が出土した。金壳古墳群は尾根の急峻な斜面に築かれた小型の横穴式石室を埋葬施設とする古墳で、築造は7世紀代に求められている。鍛神古墳群（6世紀後半～7世紀）は沼田川南岸の低丘陵の尾根線上に築かれており、土師器・須恵器や鉄刀・刀子・耳環のほかに馬具や、第2号古墳からは暗文に入った畿内系の土師器・杯が出土している。

このように当地域では6世紀後半～7世紀代にかけて小・中規模の横穴式石室を埋葬施設とする径10m程度の古墳が盛んに造られる一方で、6世紀末～7世紀の尾原川左岸の丘陵裾を中心とする地域では、県史跡梅木平古墳、史跡御年代古墳、県史跡貞丸第1・2号古墳など巨石を用いた長大な横穴式石室をもつ古墳や石室内部に家形石棺を納めた古墳など県内でも有数の古墳が築造されており、その背後には畿内政権と深く関わりをもつ官人的性格の強い豪族層の存在を考えられている。

古代 律令制下では当地域はほぼ沼田郡に該当し、のち北側の豊田郡に包括される。古代山陽道の梨葉駅が現・本郷町下北方の茅ノ市に比定されている。古代の遺跡としては、本郷町の毘沙門山下遺跡、史跡横見廐寺跡⁽¹¹⁾、西野田経塚などがある。沼田川北岸の毘沙門山南麓の毘沙門山下遺跡では県内最古とみられる素弁蓮華文の軒丸瓦片が見つかり、飛鳥時代の寺院跡が存在する可能性が指摘されている。横見廐寺跡は尾原川北岸の茅ノ市近くの丘陵南麓に築かれた白鳳期の寺院跡で、7間×4間の講堂と塔跡が東西に並ぶ西向きの四天王寺式伽藍配置をとると考えられている。出土瓦に奈良県の山田寺跡や法隆寺若草伽藍跡の瓦に類似したものがみられる一方で、三次

市寺町廃寺跡の水切りをもつ複弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、中央の有力寺院や豪族と密接な関係をもつ郡司層が本寺院の建立に深く関わっているとみられている。

中世 中世の当地域は、平安時代末期に成立する寄進地系荘園である京都蓮華王院領沼田荘の範囲に含まれる。沼田荘の地頭である小早川茂平は鎌倉時代中期の嘉承元（1235）年に三太刀遺跡の南方の巨真山寺（のちの米山寺）の境内に不断念佛堂を建立して小早川氏の菩提寺とし、その仏龕灯油料田・修理田を得るために沼田川沿いの氾濫原（塩入荒野）の開発に着手した。この干拓は沼田市や対外交易による経済力を背景に南北朝時代から室町時代にかけて當々と進められ、

「沼田千町田」ともいわれる広大な新田が完成した。一方で小早川氏は、室町將軍の奉公衆として大名領國化を進めたものの、室町幕府の衰微とともに勢力が弱体化し、ついには中国一円領主である毛利氏に吸収されてしまう。

中世の遺跡としては、山城跡がある。調査された本郷町の金壳城跡、正広城跡(12)や小早川氏の本拠である史跡高山城跡・同新高山城跡をはじめ、沼田荘の開発領主である沼田氏の居城と伝えられる高木山城跡などがある。山城跡以外では、福札古墳の墳丘の北裾で戦国期を中心とした時期の中世古墳5基（火葬1・土葬4）が検出されている。

註

- (1) 豊田郡本郷町教育委員会『広国遺跡』 1998年
- (2) 陣べら遺跡群発掘調査団『陣べら遺跡群発掘調査概報』 1971年
- (3) 潮見浩『広島県豊田郡舟木遺跡』日本考古学協会編『日本考古学年報』9 1961年
- (4) 広島県教育委員会『安芸横見廬寺の調査』II 1973年
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第3号古墳」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(X) 1994年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『みたち第2・3号古墳』 2004年
- (7) 註(6)と同じ。
- (8) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第2号古墳」「金壳・陣開」 1994年
註(5)と同じ。
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「陣開第4号古墳」「金壳・陣開」 1994年
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金壳古墳群」「金壳・陣開」 1994年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「錢神第1・3号古墳発掘調査報告書」 1986年
財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「錢神第2・4・5号古墳発掘調査報告書」 1987年
- (11) 広島県教育委員会『安芸横見廬寺の調査』I～III 1972～1974年
- (12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金壳城跡」「金壳・陣開」 1994年
- (13) 本郷町教育委員会『正広城跡』 1992年
- (14) 広島県教育委員会『福札古墳発掘調査報告』 1973年

参考文献

- ・本郷町史編纂委員会編『本郷町史』通史編 1996年
- ・三原市役所編『三原市史』第一巻通史編一 1977年

III 調査の概要

三太刀遺跡は豊田郡本郷町東端の三原市との境付近に位置する。本郷町市街の東側に広がる東西2.5km、南北1.3kmの沖積平野の中央部南端に独立丘陵（三太刀山）があり、その一角に本遺跡は存在する。南100mの至近距離を沼田川が西から東に流れ、やがて瀬戸内海に注ぐ。

三太刀山（標高35.4m）は東西280m、南北200m、周囲の水田面からの比高20～30mの小丘陵である。丘陵の南東側が幅10mほど途切れた「コ」字形の平面形をなし、その内側に東西160m、南北120mの平坦地（標高6～10m）が存在する。三太刀遺跡はこの三太刀山内部の平坦地を中心に存在する。平成12（2000）年度に中心部の畠地1,865m²（A～D区）の調査を行い、14世紀を中心とした時期の集落跡を検出した。平成14（2002）年度には西側の丘陵裾の緩斜面812m²（E区）の調査を行ったが、中世以前の遺構は近世以降の開発によりすでに破壊され、調査区南半で古墳時代～古代の土器包含層と包含層下に竪穴住居跡2軒などを検出した。

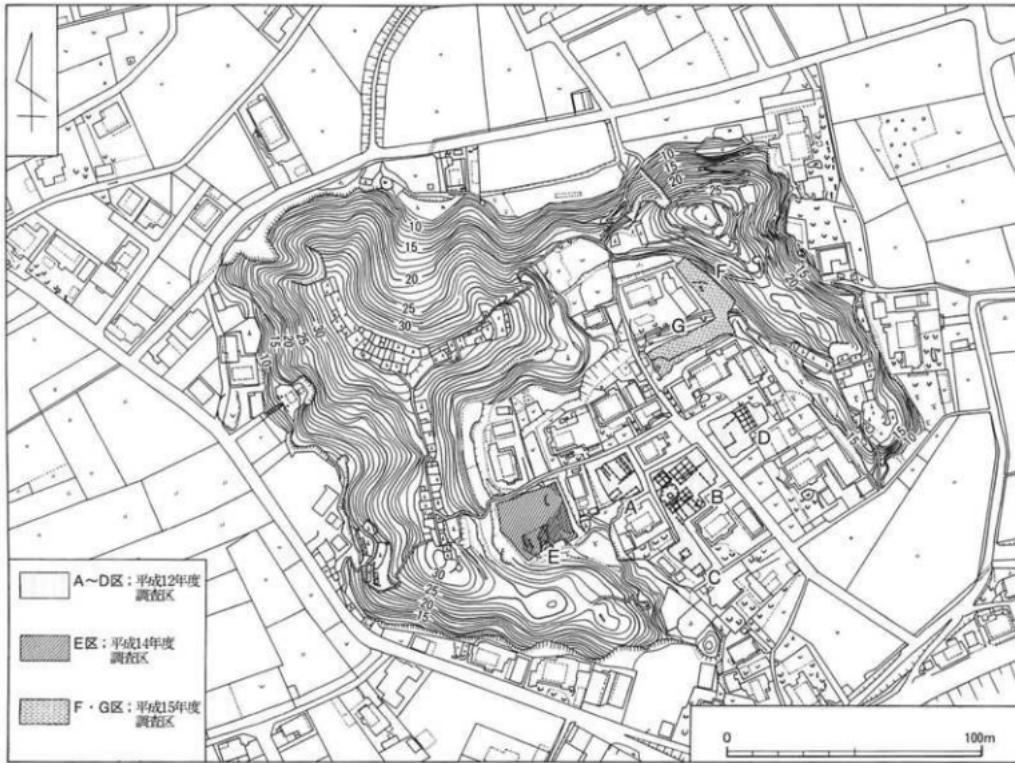
今回は遺跡北東部の、丘陵裾に南北に細長く位置するF区（標高16m）とその南西方に接する東西に長いG区（標高10m）の2か所の調査を行った。F区は竹林、G区は庭木などの園地で、G区の西端には雑種地7.21m²（3852番地）が存在するが、今回の調査対象からは外れた。

調査はいずれも重機（バックホー0.45m³）で遺構面近くまで表土などを掘り下げて行なったが、F・G区とも遺構面まで最大1.7～1.8mと深いため、調査区際から1m程度の安全帯を残すと共に、緩やかな法面を設けて掘り下げを行なった。なお、G区の下段平坦面では遺構面近くから一定程度の湧水がみられた。

F・G区で検出した遺構の内訳は、井戸1基（SE1）、土坑15基（SK1～15）、溝状遺構1条（SD1）、性格不明の遺構2基（SX1・2）である。出土遺物の総量は中型コンテナ4箱程度だが、完形品は皆無でいずれも破片である。本報告書では計84点を実測・掲載する。その内訳は、土師質土器51点（小皿・杯・皿・椀・鍋・壺・擂鉢）、黒色土器2点（椀）、瓦器7点（小皿・杯・椀）、瓦質土器1点（擂鉢）、白磁2点（碗）、須恵器12点（皿・杯身・杯・椀・小椀・高杯）、須恵質土器1点（鍋）、土師器4点（壺・瓶）、土製品3点（棒状土錐・管状土錐）、石製品1点（砥石）である。

註

- (1) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三太刀遺跡』(I) 2003年
(2) 財団法人広島県教育事業団『三太刀遺跡』(II) 2004年



第2図 周辺地形図 (1:2,000)

IV 遺構と遺物

1. F区の遺構（第3図、図版1b・1c・2）

F区は調査区の東側から北側にかけて丘陵の急斜面に接し、西側は宅地、南側は崖面を経て、G区の東端に連なる。現地表面はやや北東から南西方向に傾斜するものほぼ平坦である。遺構面までは調査区西辺の北端で60cm、南端で180cmと深い。基本層序は、西壁南端（SX2北側）で上から①暗灰褐色砂質土（厚さ60cm）、②暗黃褐色砂質土（厚さ30cm）、③暗灰黄色砂質土（厚さ30cm）、④包含層（淡茶褐色粘質土、厚さ30cm）、⑤黄褐色砂質土（厚さ30cm）で、遺構面=地山（花崗岩バイラン土）に至る。④包含層は調査区西壁際の南半を中心に広がり（厚さ20~50cm）、土師器・須恵器・瓦器などを一定量含むものの、量的にはそれほど多くはない。遺構面の標高は調査区北隅が最も高く、南隅に向ってやや強く傾斜しており、その比高差は3.6mである。

検出遺構は、土坑1基（SK1）、性格不明の遺構2基（SX1・2）で、調査区の北辺から東辺にかけて近世の溝状遺構がめぐる。SK1は墓、SX1は段状の遺構でいずれも中世のものとみられるが、SX2は古代後期～中世前期と思われる。

（1）土坑（第4図、図版2d・2e）

SK1は中世の墓坑と考えられるもので、F区のはば中央に位置する。平面形は隅丸長方形で、長さ200cm、幅81cm、深さ18cmである。ほぼ南北方向（N20°W）に主軸をもつ。

出土遺物（第6図1・2、図版9） 埋土から、土師質土器・皿（1）、同・擂鉢（2）各1点が出土した。

皿1は底部片で、調整は内底面・体部内外面が回転ナデ、底部回転糸切り離しである。擂鉢2は斜め方向の擂目が刻まれ、やや部厚い口縁端面の中央が浅く凹む。色調は淡褐色である。

（2）性格不明の遺構

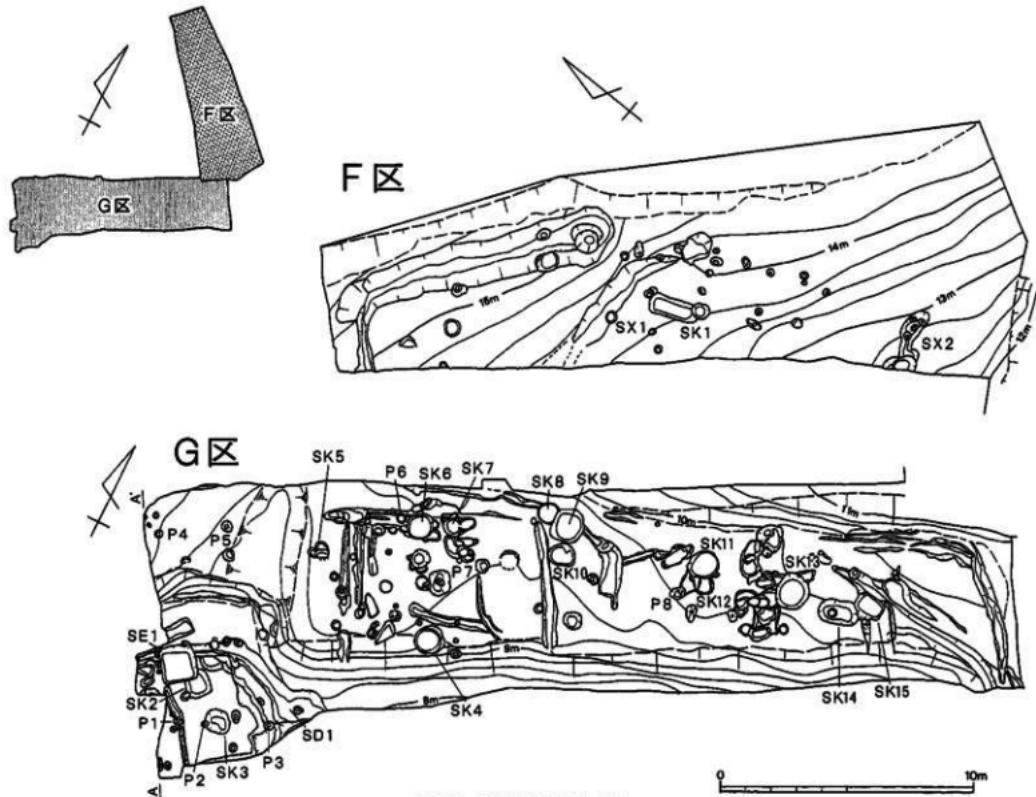
段状のSX1と溝状のSX2を検出した。

① SX1（第5図、図版2d・2f）

F区はば中央で検出した段状遺構で、ほぼ東西方向に走る等高線に沿って掘り込まれている。西端が調査区外に延びており、現存規模は東西5.12m×南北1.1m、壁高（最大）64cmである。周辺にはピットがいくつかみられるが、明確な柱穴は存在しない。

出土遺物（第6図3・4、図版9） 西半の床面で土師質土器・小皿（3）、同・鍋（4）各1点が出土した。

皿3は、底部回転糸切り離し、体部内外面回転ナデである。色調は暗褐色である。鍋4は薄手

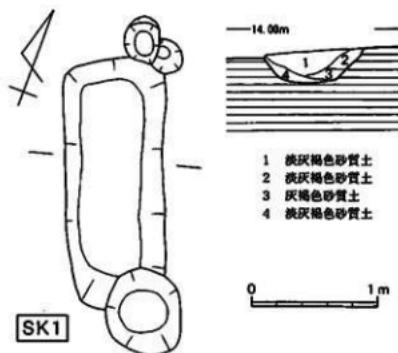


第3図 造構配図 (1:200)

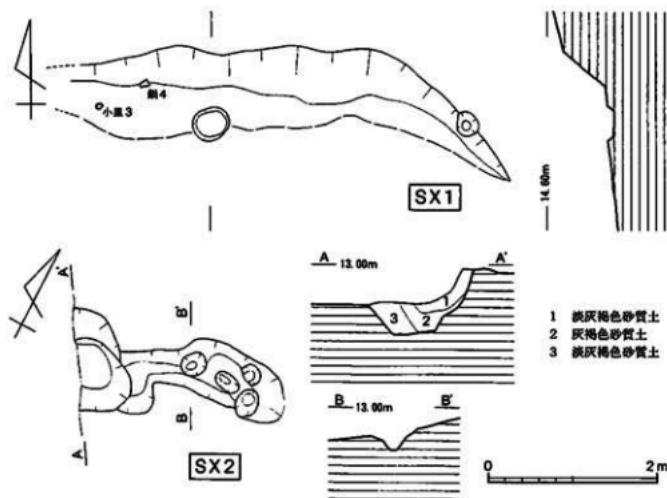
の体部からやや外反して延びる肥厚した口縁部の端面がやや凹む。内面には横方向の密なハケ目を施す。色調は橙褐色である。

② SX2 (第5図、図版2g)

F区の南端に位置し、遺構の西半は調査区外に延びる。現存規模は東西2.72m×南北1.22m、深さ(最大)41cmだが、直径1.2m、深さ30~44cmの円形土坑と長さ2m、幅(最大)70cm、深さ



第4図 F区SK1実測図 (1:40)



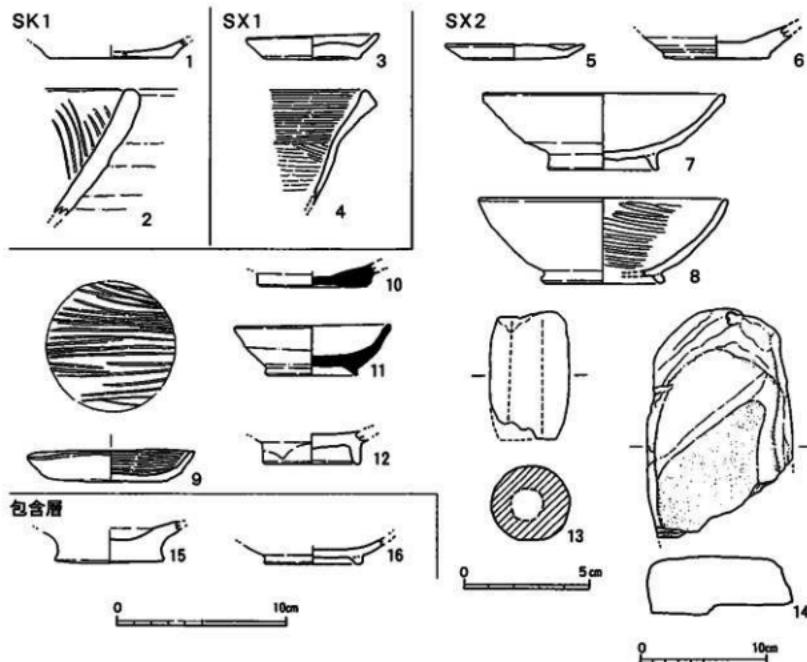
第5図 F区SX1・SX2実測図 (1:60)

1~20cmの溝状造構の2つの造構が重複している可能性がある。

出土遺物（第6図5~14、図版9） 西半の円形土坑部分から、土師質土器・小皿（5）、同・杯（6）、須恵器・杯（10）の3点が、東半の溝状造構部分から、土師質土器・椀（7）、黒色土器・椀（8）、瓦器・小皿（9）、須恵器・小椀（11）、白磁・碗（12）、管状土錐（13）、砥石（14）各1点の7点が出土した。

土師質土器は小皿・杯・椀の3点がある。小皿5は低平な器形で、部厚い底部に直線的に延びる口縁が付く。底部回転糸切り離し、体部外面回転ナデである。杯6は部厚い底部片で、やや突出して総高台状をなしている。静止糸切りの可能性があり、体部内外面回転ナデを施す。内底面中央にはナデつけがみられる。色調は橙褐色である。椀7はハ字状に踏ん張る輪状の貼付高台を持ち、内湾気味に外上方に延びる体部に端部を丸く納める口縁が付く。体部下半の外面には緩やかな稜がみられる。体部内面にミガキを、高台周辺には回転ナデを施す。色調は表面が淡黄褐色で、胎土は灰黒色である。胎土は精良である。

8は黒色土器・椀である。内面にのみ炭素を吸着させたいわゆる内黒のA類である。短くハ字



第6図 F区出土遺物実測図 (1:2, 1:3, 1:4)

に踏ん張る貼付高台に内湾気味に立ち上がるやや深い大振りの体部をのせている。体部内面には横方向のヘラミガキを施している。

9は完形の瓦器・小皿である。体部は短く、やや内湾気味に外上方に延び、端部は丸く納める。内面全体に横方向の平行暗文がみられる。体部外面の上半は横ナデ、下半は未調整と思われる。底部は指頭による粗いナデつけにより凹凸がみられる。

須恵器は10が杯、11は小碗である。10は体部から突出した縦高台状の底部片で、内底面及び体部外面は回転ナデ、底部は回転ヘラ切り未調整である。色調は淡青灰色である。11は貼付高台が付く小碗で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。体部の中位よりやや下方に緩やかな稜がみられる。この稜から下位の体部外面及び内底面・外底面中央はいずれも未調整で、ほかは回転ナデである。色調は暗灰色である。

12は白磁・碗の高く直立する削り出し高台片で、内底面と高台外面に透明釉が施されている。素地の色調は灰白色である。

13は管状土錐である。色調は淡黄褐色で、焼成はあまり良好ではない。

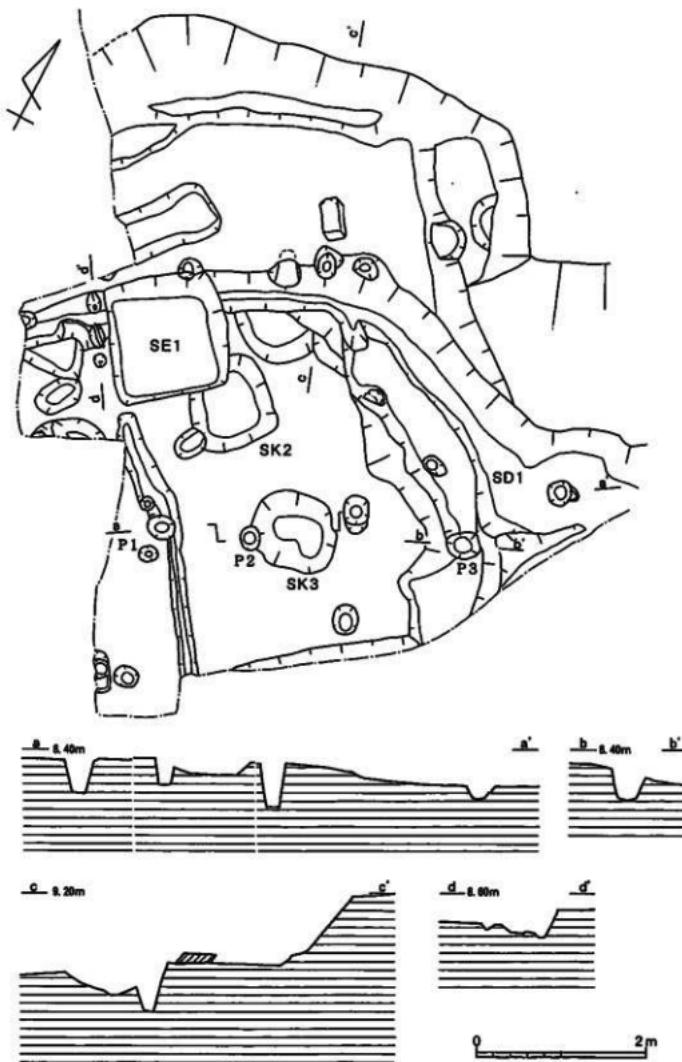
14は砥石で、表面下半に平滑な使用面がみられる。側面・上面は自然面、裏面・下面是剥離面である。暗灰色～暗灰白色の石材を用いている

(3) 包含層出土遺物 (第6図15・16、図版9)

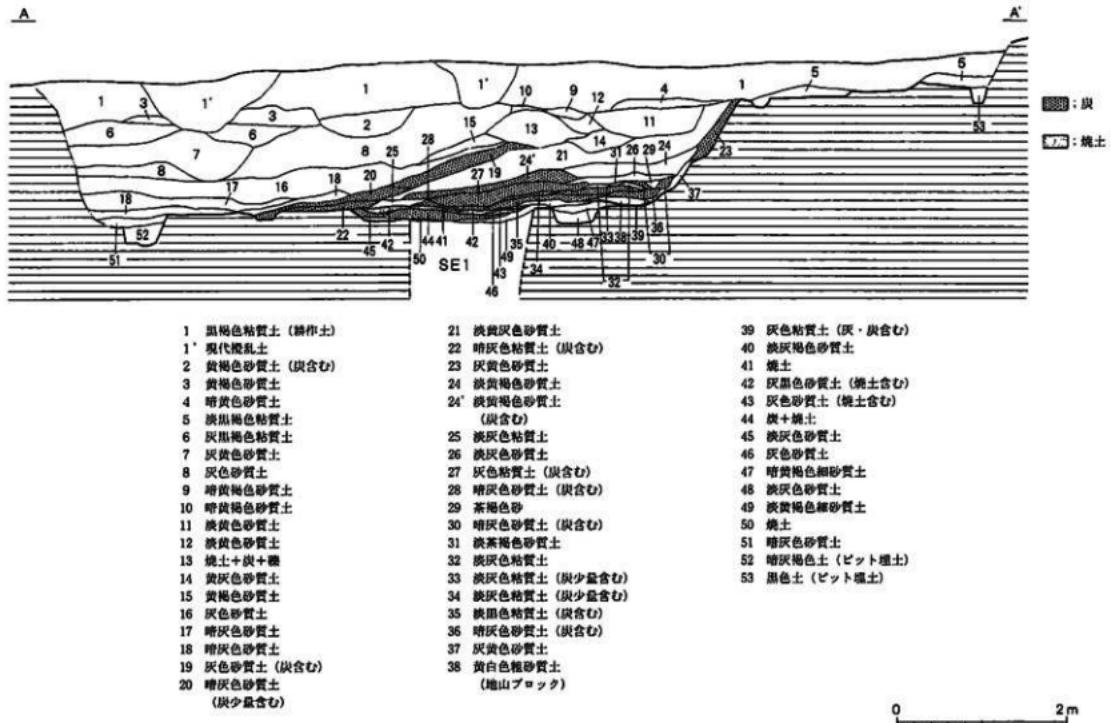
土師質土器・杯(15)と瓦器・椀(16)がある。土師質土器・杯15は体部から強く突出した部厚い縦高台状の底部片である。内底面は丁寧なナデにより回み、体部外面は横ナデ、底部は回転ヘラ切りである。色調は淡黄褐色で、胎土は精良、焼成も非常に良好である。瓦器・椀16はややハ字状に踏ん張る短い貼付高台をもち、内底面はミガキ、体部外面は横ナデを施している。

2. G区の遺構 (第3図、図版3～8)

G区は北側背後の宅地から30°の傾斜角度で下り、5mほどの比高差がある。東端はF区同様丘陵斜面に接する。現地表面はほぼ平坦であるが、遺構面は南北に段差を持ち、北側の上段平坦面は現地表面から深さ26～40cm、南側の下段平坦面は深さ164～170cmで、両平坦面の比高差は約1.2～1.3mである。上段平坦面の標高は9～10m、下段平坦面は8mである。上段平坦面の下段平坦面への落ち際の線は調査区の南辺に沿ってほぼ直線的に延びて(N64°E)、調査区南東隅で緩やかに南方向に屈曲するとみられるが、西端では長さ5m以上にわたって最大2.8mほど北にほぼ方形状に突出する。この突出部の平坦面はSD1を挟んで南に存在する平坦面よりも20cm程度高い(上段平坦面から約1m)。このG区の基本層序は、①表土(黒褐色粘質土)=1層(厚さ20～60cm)、②黄褐色砂質土=3層(厚さ10～20cm)、淡黒褐色粘質土=5層(厚さ10cm)、灰黒褐色粘質土=6層(厚さ30cm)、灰黄色砂質土=7層(厚さ20～60cm)、③灰色砂質土=8・16層(厚さ20～56cm)、淡黄色～黄褐色砂質土=11・12・15層(厚さ10～20cm)、④暗灰色砂質土=17・18層(厚さ3～20cm)、⑤灰色～暗灰色砂質土(炭含む)=19層(厚さ2～10cm)、⑥



第7圖 G區下段平坦面造構實測圖 (1:60)



第8図 G区西壁土層断面図 (1:60)

淡黄灰色～淡黄褐色砂質土=21・24層（厚さ2～30cm），⑦淡黄褐色～灰色粘質土・砂質土（炭層）=24'・27・28・35・36・39層など（厚さ20cm），⑧焼土層=41・42層（厚さ2～4cm），⑨炭+焼土=44層（2～8cm），⑩暗黄褐色～淡黄褐色細砂質土=47・49層（厚さ5cm）となる。造構面=地山は花崗岩バイラン土～黄褐色粘質土である。上段平坦面は①を主に部分的に②の5層，下段平坦面では北から南に迫り出すように堆積しており，中央のSE1あたりを境に北と南で堆積状況が大きく異なる。基本的に，突出部平坦面からSE1直上にかけて最も古い⑩が堆積し，その上に薄い焼土層の⑧を挟んで，⑤⑦を主体とする炭層が部厚く堆積する。SE1の南には炭層や焼土層は西壁には表れていないが，実際には南西隅を除く下段平坦面（SD1を中心とする）ほぼ全体に厚さ最大10cm程度の間層（⑩層）を介して2～3枚の炭層（部分的に焼土層を挟む）が広く堆積しており，下段平坦面の造構群の機能が停止してそれほど時間差を置かない時点で複数回の火災を受けたものと考えられる。なお，上段平坦面では火災の痕跡はみられない。

検出造構は，下段平坦面で井戸1基，土坑2基，溝状造構1条，ピット，上段平坦面では土坑12基，ピットなどで，下段平坦面の造構の多くは中世と思われるが，上段平坦面の造構は近世を主体とするものの，造構に伴う遺物が少なく明確でない。いずれにしろ，下段平坦面と上段平坦面とでは造構のあり方や出土遺物の内容・出土状況などかなり様相が異なることから，同時存在は考えにくい。上段平坦面は古代には現状に近い状態であったものが，中世の時期に何らかの理由で半ば埋もれてしまい，近世頃に再び削平を受けたのではないかと推定される。

a. 下段平坦面（第3・7図，図版4a・5c・5h）

本来的な中世の造構面であるが，今回はごく一部の検出に止まつた。北側に突出した一段高い突出部平坦面には西壁沿いに溝状造構がみられるほかは明確な掘り込みはみられない。その南側には素掘りの井戸，溝状造構，土坑，ピットが存在する。10数個存在するピットは現状では建物跡を構成せず，一部を単独柱穴として取り上げた。

（1）井戸（第9図，図版4b・4c・5d）

SE1は西壁沿いにある素掘りの井戸で，平面形隅丸方形，南北143cm×東西140cm，深さ212～227cmの規模である。底面は壁際が高く中央に向けて緩やかに曲がっている。また，土層観察によると，下半では壁際に幅5～9cmの淡灰色粘質土がみられ，その内側にはやや締まった褐色味を帯びた灰色粘性砂質土が存在する。そして，中央には径1mほどの軟質の淡褐色粘質土が堆積している。淡灰色粘質土は何らかの壁際の構造物，灰色粘性砂質土は裏込土，淡褐色粘質土は井戸枠あるいは集水施設の可能性が考えられる。また，壁面には井戸の掘削に伴うと考えられる縦方向のスコップ状の掘削痕がみられた。

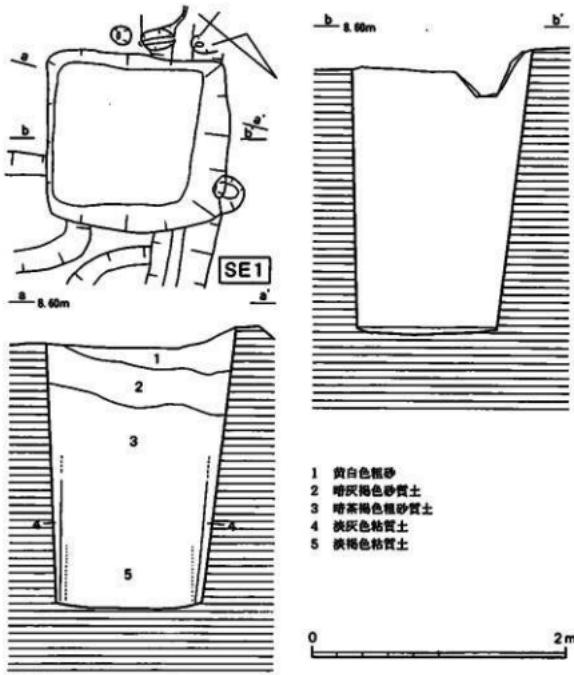
出土遺物（第11図17～19，図版9）　いずれも土師質土器で，いずれも胎土が精良で，焼成も良好であり，ほかの土師質土器類との間に差異が認められる。皿（17）が上層出土，椀（18）・杯（19）が下層出土である。なお，下層の出土遺物の大半は壁際から出土している。井戸枠の外，

つまり裏込土からの出土と考えられることから、少なくともSE1下層から出土した遺物の多くは井戸使用時のものであるよりは井戸構築時のものである可能性が高い。

皿17・椀18とともに底部片で、17は体部からやや突出気味の縦高台状の底部である。底部回転糸切り離しのち板目痕が残る。体部外面に回転ナデが施されている。色調は淡黄褐色である。18は比較的低平な体部に断面三角形の低い貼付高台が付く。内外面とも全体に回転ナデを施す。色調は灰白色である。杯19は体部を中心とした破片で、底部回転糸切り離し、体部内外面は回転ナデである。色調は淡橙色である。

(2) 土坑

浅い土坑2基(SK2・3)がある。

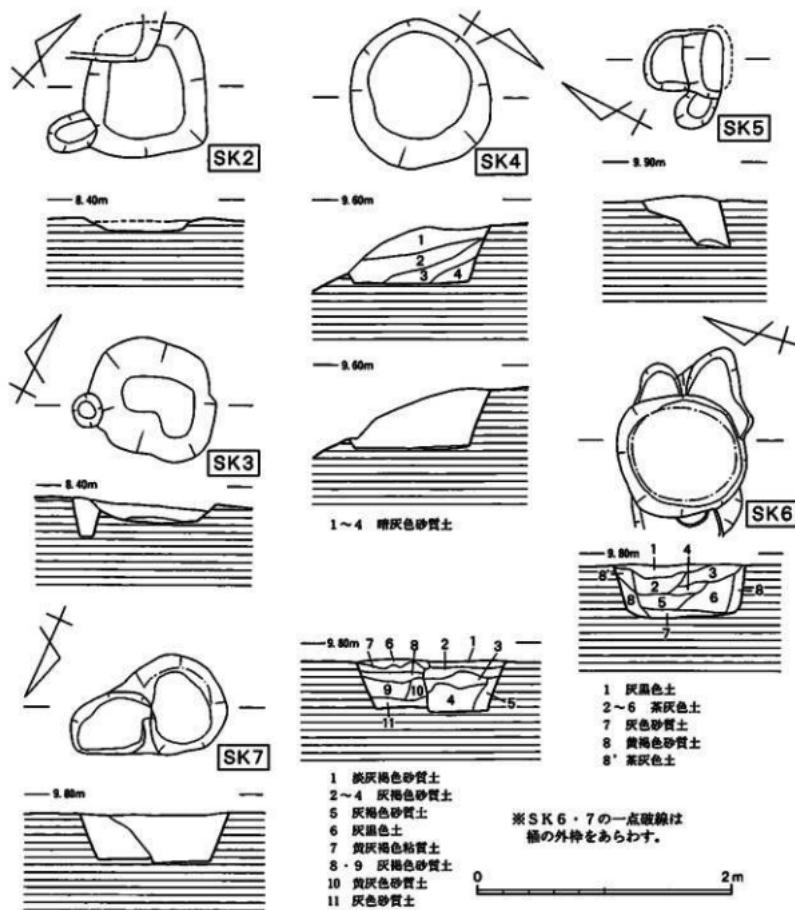


第9図 G区SE1実測図 (1:40)

① SK 2 (第10図、図版5 e)

SE 1の南東側に重複して存在する。埋土は暗灰色で、SE 1を壊している。平面形隅丸方形で、103cm×96cm、深さ11cmである。図示できないが、瓦器片、土師質土器・小皿片が出土しており、中世の遺構と思われる。

② SK 3 (第10図、図版5 f)



第10図 G区土坑実測図(1) (1:40)

S K 2 の南東0.6mにある土坑で、平面形隅丸不整方形、103cm×90cm、深さ19cmとS K 2 に類似した形態・規模である。埋土は暗灰色で、西側でピットP 2 と重複し、これに壊されている。時期が判明するような遺物は出土していないが、中世以前と考えられる。

(3) 溝状造構

S D 1 はS E 1 に先行する溝状造構で、下段平坦面の北辺を北西から南東方向に大きく曲線を描きながら流れる。埋土は暗灰色粘性砂質土で、現存規模は幅38~174cm、深さ35~39cmである。ほぼ東西に流れる西半は幅38~52cmと幅狭く、北西から南東方向に流れる東半は次第に幅広くなる。S E 1 西側ではS D 1 に直交して南北两岸に幅16cm、深さ19~43cmの短い溝状の掘り込みがみられる。S D 1 の底面とこれら小溝の底面とはほぼ同一面であることから、これらの小溝はS D 1 を堰き止める何らかの施設である可能性が考えられる。その場合、S E 1 はS D 1 と同時期に存在したことになり、一種の集水施設的機能を持っていた可能性がある。

出土遺物 (第11図20~27、図版9) 図示したものはいずれも東半からの出土で、土師質土器・小皿3点(20~22)、皿1点(23)、杯2点(24・25)、椀2点(26・27)の8点である。

20~22は小皿で、口径7.8~8.4cm、器高1.3~1.5cmと似通った法量値を示す。20・22は平底の底部に外上方に直線的に延びる体部が付く。いずれも底部回転糸切り離し、内底面・体部内外面回転ナデだが、22は体部外面下半は未調整である。色調は、20が淡黄褐色、22が淡橙褐色である。21は底部が丸みの強い凹凸を持つもので、手づくねによるものと思われる。やや内湾気味に延びた口縁端部を短く内側に曲げ、外面に緩やかな稜が形成されている。調整は、内面がミガキか丁寧なナデ。体部外面は回転ナデである。色調は淡橙色~淡黄褐色で、胎土は精良である。

23は皿で、内湾気味に外上方に延びる体部の下端が凹んでやや総高台状に突出気味の底部をもつ。底部回転糸切り離しののちに板目痕が残る。体部内外面は回転ナデ、内底面は一定方向のナデつけを施す。色調は淡黄褐色である。

24・25は杯で、24は平底から体部へ緩やかな曲線を描いて屈曲し、底部回転糸切り離しである。25は平底からやや外開きに内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近でやや外反する。底部回転糸切り離し、体部内外面は回転ナデである。色調は、いずれも淡黄褐色である。

26・27は椀である。26は短く外下方に踏ん張った貼付高台の破片で、内底面は乱雑なナデのうちにヘラミガキ、外面は横ナデを施す。灰白色の精良な胎土で、ほかの土師質土器とはやや異なる。27は丸底で深い無高台の椀である。底部には指頭による調整がみられる。色調は白っぽい淡黄褐色である。

(4) 単独柱穴

下段平坦面で検出した20個ほどのピットはいずれも現状では建物跡を構成しないが、中央付近にあるP 1 ~ P 3 の3個のピットからは土師質土器や瓦器の破片が出土しており、中世の建物跡の柱穴の可能性がある。

(5) 覆土出土の遺物（第11・12図）

下段平坦面の覆土から出土した遺物について述べる。なお、覆土「下層」とは便宜的に下段平坦面直上（～30cm程度）を指し、覆土「上層」はそれより上位全体を指す。図示した遺物は計44点で、上層出土が16点（28～43）、下層出土が28点（44～71）である。

① 覆土上層出土の遺物（第11図28～43、図版9）

土師質土器・小皿1点（28）、同・杯3点（29～31）、同・皿5点（32～36）、同・椀2点（37・38）、黒色土器・椀1点（39）、土師器・甌1点（40）、須恵器・椀1点（41）、白磁・碗1点（42）、棒状土錐1点（43）である。

28～38は土師質土器で、小皿・杯・皿・椀がある。28は小皿で、平底の底部から外上方に直線的に延びる体部が付く。底部回転ヘラ切り、体部外面は回転ナデで、内面は全体に未調整である。色調は淡黄褐色である。29～31は杯である。29はやや小型の杯で、平底の底部から外反気味に延びる長めの体部が付く。底部回転糸切り離し、内面から外面口縁部にかけて回転ナデが認められる。色調は淡橙色である。30は平底の底部から外上方にほぼ直線的に体部が延びる。底部回転糸切り離し、内底面及び体部内外面回転ナデである。色調は橙褐色である。31は平底の底部からやや内湾気味に外上方に立ち上がった体部から先細りになった口縁端部を丸く納めている。体部下端はやや凹む。底部回転糸切り離し、内底面及び体部内外面は回転ナデを施す。色調は淡黄褐色である。32～36は皿である。復元口径10.9～13.0cmと法量的には幅があるが、丸みの強い底部、底部と短く外上方に延びる体部との境に緩やかな稜が形成されるなど形態的には類似点が多い。内面全体と体部外面はいずれも回転ナデ、丸みの強い外底面は32が指頭によるナデ、33がヘラ切り、34・36は未調整の可能性が高い。色調は35が淡橙色で、ほかはいずれも淡黄褐色である。37・38は椀である。37は断面三角形の貼付高台をもつ。内面は丁寧なナデ、高台周辺に回転ナデが看取される。胎土は淡黄褐色の精良なもので、器壁も比較的薄い。38は平底の底部から曲線を描いて内湾気味に外上方に延びる体部をもつもので、外面の底部と体部の境に貼付高台が剥がれた痕跡がみられる。内底面及び体部外面上半は回転ナデ、体部内面は斜位のやや雑な幅広のヘラミガキ、体部外面下半は未調整、外底面は指頭によるナデ調整を施している。色調は淡黄褐色で、胎土は精良である。

39は黒色土器・椀の高台片である。内面にのみ炭素を吸着させたいわゆる内黒のA類である。高台は断面逆台形で「ハ」字に踏ん張る。内面はミガキ調整、外面の高台周辺は回転ナデ、体部は未調整である。

40は復元口径26.0cmの土師器・甌である。内湾気味に直立し、口縁付近で僅かに外反する。体部中位よりやや上方にある把手は薄手の牛角状のものである。体部内面下位2/3は指頭による調整、体部内面上位1/3～口縁部内外面は横ナデ、体部外面は板ナデを施す。色調は暗赤褐色である。

41は生焼けの須恵器・椀である。厚みのある底部に断面三角形の貼付高台が付く。内湾しながら開き気味に直立した体部は丸みの強い深い椀である。内底面及び外底面は回転ナデ、体部内外

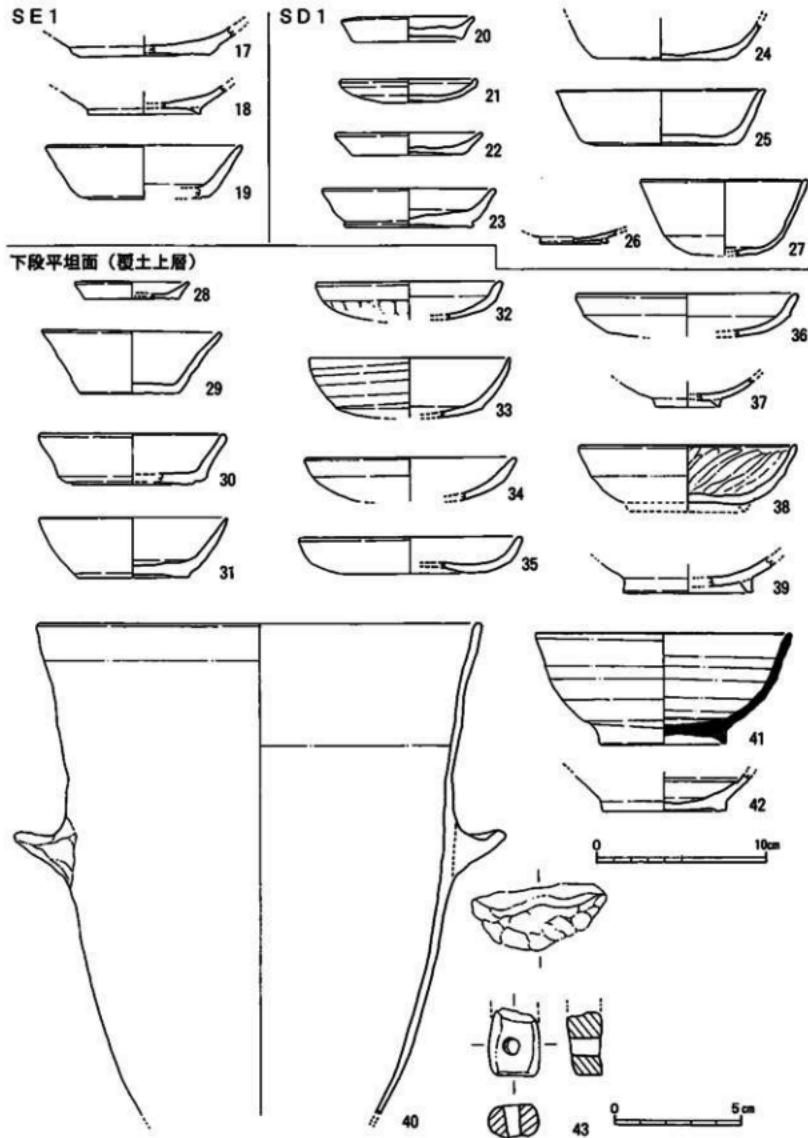
面は強い回転ナデにより凹凸が顕著である。色調は淡黄褐色～淡橙色、焼成はかなり良好である。42は白磁・碗の高台片で、高台の削り出しが浅い。体部内面の比較的高い位置に片刃彫りによる沈線の円闇が廻る。沈線の下位には比較的緩やかな屈曲がみられる。内面には薄く透明釉が施されるが、外面は体部下半以下無釉である。素地の色調は灰白色である。

43は棒状土錐の下端部の破片で、断面扁円形の平面に円孔を穿つ。色調は表面淡黄褐色、胎土灰黒色である。

②覆土下層出土の遺物（第12図44～71、図版10）

計28点で、土師質土器・小皿6点（44～49）、同・杯2点（50・51）、同・皿8点（52～58・61）、同・椀1点（59）、同・鍋1点（60）、瓦器・小皿1点（62）、同・椀4点（63～66）、須恵器・杯身1点（67）、同・杯1点（68）、同・椀1点（69）、同・高杯1点（70）、須恵質土器・鍋1点（71）である。

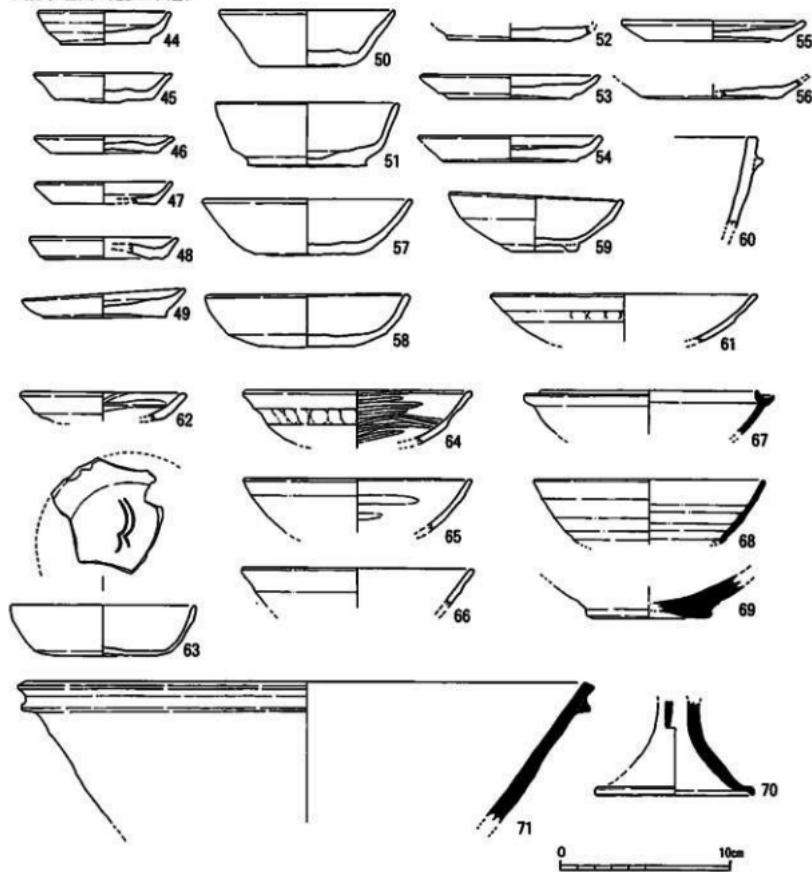
44～61は土師質土器で、小皿・杯・皿・椀・鍋がある。44～49は小皿で、口径7.6～9.4cm、器高1.0～1.95cmである。44は器高が比較的高い器形で、突出気味の底部から内湾しながら外上方に延びる体部をもつ。49もやや突出気味の底部から内湾気味に延びる体部が付く。その他は底部から外上方に直線的あるいはやや外反気味に延びる体部である。底部は45・46が回転ヘラ切り、ほかは回転糸切り離しで、49には板目痕が残る。体部の調整は残りが悪いもののほぼ回転ナデが施されている。色調は44が橙褐色、46が淡橙色～淡黄褐色、ほかは淡黄褐色である。44・46は焼成がかなり良好である。50・51は復元口径10.0～10.4cm、器高3.3～3.8cmの杯である。50はやや部厚い平底の底部から外上方に外反気味に延びる体部が付く。底部回転糸切り離し、内面の体部と底面の境が回転ナデにより凹む。色調は淡黄褐色である。51はやや強く突出した総高台状の底部から屈曲してやや開き気味に直立する体部が付く。底部糸切り離し、体部内外面・内底面は回転ナデである。色調は淡黄褐色である。52～58・61は皿だが、低平な52～56と器高が高く、杯あるいは無高台の椀に近い形態の57・58は形態的に大きく異なる。52～56は口径10.5～10.7cm、器高1.2～1.5cmとかなり低平である。52～54は形態的には平底の底部からやや内湾気味に短く外上方に延びる体部を持ち、底部が体部からやや突出して総高台状をなすなど類似している。調整面では、52・54が底部糸切り離し、53はヘラ切りのうちにいずれも板目痕を残している。52・53は内底面中央が指頭によるナデつけで凹み、52の体部内外面と54の内底面及び体部内外面に回転ナデを施している。55・56は平底の底部から直線的に外上方に延びる短い体部をもつ。56は底部糸切り離し、55の内底面、56の内底面及び体部外面には回転ナデが認められる。色調はいずれも淡黄褐色で、56はかなり焼成が良好である。57・58は口径11.8～12.2cm、器高3.1～3.3cmと大型のもので、52～56の皿の低平度（器高／口径）が0.11～0.14であるのに対して、57・58のそれは0.26～0.27である。57は平底の底部から緩やかに屈曲して外上方に直線的に延びる体部をもち、58は平底のやや小さな底部から内湾しながら外上方に立ち上がる体部をもつ。いずれも残りは良くなく、57は底部糸切り離しで外面口縁に僅かに回転ナデが認められる。色調は、57が橙色、58は淡



第11図 G区出土遺物実測図 (1) (1:2, 1:3)

褐色～淡黄褐色である。61は胎土がほかのものと異なり、灰白色の精良なものである。やや内湾しながら外上方に開き気味に延びる体部をもち、復元口径15.1cmである。調整は、内面が横方向のミガキ状の丁寧なナデ、外面口縁部が横ナデ、その下位に指頭による押圧調整、体部は未調整である。59はやや小型の椀で、断面三角形～逆台形の雑な輪状高台を貼り付けている。調整は、内面全体にミガキ状の丁寧なナデ、外面体部上半に回転ナデ、体部下半～外底面は未調整かあるいは

下段平坦面（覆土下層）



第12図 G区出土遺物実測図 (2) (1:3)

は指頭による調整とみられる。色調は淡黄褐色で、胎土は精良である。60は断面三角形の突帯を外面の口縁直下に貼り付けた鍋の小破片である。内外面ともに横ナデで、外面にはススが付着している。口縁端面は平坦で、内面側の縁辺は鋭い。

62～66は瓦器である。62は小皿で、器壁が比較的厚い。丸みの強い底部から緩く屈曲して外上方に短く直線的に延びる体部が付く。調整は、内面が横方向のヘラミガキ、外面体部は横ナデである。63～66は椀で、63は平底の底部から緩やかに屈曲してやや開き気味に直立する体部をもつ。外底面は指頭による調整、内面は回転ナデで、内底面には花弁様の暗文がみられる。64・65は復元口径13.0～13.2cmのやや大型品で、やや内湾しながら開き気味に外上方に延びる体部である。64は内面には横方向のヘラミガキが密に施され、外面は口縁部が横ナデ、その下位は指頭押圧により器壁が凹む。体部下半は未調整である。65は、内面横方向のヘラミガキ、外面の口縁が横ナデ、体部は未調整である。66は外上方に直線的に延びる体部である。内外面回転ナデである。

67～70は須恵器である。67は杯身で、直線的に外上方に延びた体部から外方に屈曲した受部の端部を上方に摘み上げ、内上方に短く延びた立ち上がり部は端部を先細りに納めている。受部は比較的強く凹むが、立ち上がり部との境はやや不明瞭である。色調は明青灰色である。68は底部から屈曲して外上方にほぼ直線的に延びる体部が付く。体部内外面回転ナデで、凹凸が比較的顕著である。色調は明青灰色である。69は椀で、体部から突出した縦高台状の底部片である。調整は、内面及び体部外面は回転ナデである。70は高杯で、ラッパ状に外下方に開く脚部の裾を水平に屈曲させたのち、端部を短く垂下させている。調整は内外面ともに回転ナデを施している。色調は淡青灰色である。

71は須恵質の鍋で、復元口径32.5cmである。底部から外上方に直線的に延びた体部の端部を平坦に納めて口縁としている。外面の口縁直下に断面三角形の突帯を貼り付けている。内面及び外面の口縁から突帯部分あたりまで横ナデ、体部外面は未調整あるいは凹凸が顕著にみられることがから、指頭による調整の可能性もある。外面の突帯より下位の体部全体にはススが付着している。色調は灰色である。

b. 上段平坦面

下段平坦面の北側背後の1.2～1.3m高い位置にある平坦面である。明確な中世の遺構は少なく、中世の遺物の出土も殆どみられない。面積的にはG区の大半を占め、溝状遺構や土坑など遺構も下段平坦面に較べ多い。しかし、溝状遺構はいずれも近現代のものと思われ、土坑の多くも時期不明か中世末から近世に下る時期のものと考えられる。なお、一部に古墳時代後期～古代に遡るピットや土坑がみられる。上段平坦面が古代において現状に近い状態であったことは否定できないが、少なくとも三太刀遺跡の中心的な時代である中世においては、埋没など遺構が形成されにくい状況であったと考えられる。

この上段平坦面では、土坑12基（SK 4～15）、単独柱穴5個（P 4～8）を検出した。

(1) 土坑

土坑は計12基存在する。平面形円形で径1m程度の大きさのものが多い。出土遺物が少なく、時期や性格については明確でないものが多いが、土層観察によって比較的しっかりした裏込土が捉えられ、桶を埋設していたと考えられる土坑が5基（SK 4・6・7・11・13）存在する。なかでも、SK 13は底板を中心とする桶材がよく残っていた。これらの多くは近世を中心とした時期のものと考えられる。また、平面形隅丸長方形のSK 15は中世、上段平坦面の中央付近で集中的にみつかったSK 8～10の3基は古代の可能性が強い。

① SK 4 (第10図、図版6a・6b)

上段平坦面中央やや西寄りの、下段平坦面に続く斜面際に存在する。平面形円形で、118cm×110cm、深さ46cmである。土層観察では明確ではないが、底面に淡灰色に変色した円形の痕跡が残っており、内部に径80cmほどの桶が埋設されていたと思われる。埋土は暗灰褐色土である。図示できる出土遺物はない。

② SK 5 (第10図)

上段平坦面西半にあり、楕円形の土坑の西側に小ピットが付いた形態で、62cm×54cm、深さ40cmである。楕円形部分は南北に2段掘りになっており、下段は南にオーバーハング状に掘り込まれている。埋土は茶褐色である。

出土遺物（第16図72、図版10） 検出面から10cmのあたりで出土した須恵器・杯身1点がある。ほぼ底部から外上方に直線的に延びた体部の端部を水平に折り曲げて受部とし、その屈曲した個所から内上方に延びる立ち上がり部が付く。立ち上がり部は中央で緩く外反する。受部と立ち上がり部の境は明瞭である。調整は全体に回転ナデを行ない、色調は暗青灰色である。

③ SK 6 (第10図、図版6c・6d)

上段平坦面の西半北辺際にあり、周辺にはSK 7やP 6・P 7などがある。上部を東西に走る近現代の溝によって壊されている。平面形円形で、100cm×95cm、深さ41cmである。黄褐色砂質土（8層）・茶灰色土（8層）の裏込土が観察されることから、内部に径82cm×72cm程度の大きさの桶が埋設されていたと思われる。桶の部分の埋土は茶灰色土（2～6層）・灰色砂質土（7層）である。図示できる出土遺物はない。

④ SK 7 (第10図、図版6e・6f)

SK 6の東に近接して存在する土坑で、平面形円形、径78cm、深さ41cmとやや小型である。東側に66cm×49cm、深さ38cmの平面不整長方形の土坑が接して存在する。土層観察から一体のものである可能性が高い。土層観察による限りでは、円形部分の南半に裏込土（灰褐色砂質土・5層）が半円形に確認できる。この裏込土に囲まれた円形部分の中央には径48cmほどの桶が埋設されて

いたと考えられる。図示できる出土遺物はないが、円形部分の内部から土師器・壺と思われる破片が比較的まとまって出土しており、埋壺造構の可能性もある。

⑤SK 8 (第13図、図版6 g)

上段平坦面ほぼ中央の北辺寄りで検出した土坑で、周辺には近接してSK 9・10がある。東側をSK 9に、上部を東西に走る近現代の溝によって壊されている。平面形円形で、径81cm、深さ17cmと浅い。埋土は灰褐色砂質土である。図示できる出土遺物はない。

⑥SK 9 (第13図、図版6 h)

SK 8の東側にその一部を壊して存在する。SK 8と同様、その上部を近現代の溝で壊されている。平面形隅丸方形、南北135cm×東西118cm、深さ40cmである。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物 (第16図73~75) 須恵器・皿 (73)、土師器・壺 (74)、棒状土錐 (75) 各1点が出土した。

須恵器・皿73は底部から緩やかな曲線を描いて屈曲し、短く直立する体部をもつ。内面から外面体部上半にかけて回転ナデ、外面体部下半は未調整で、ごく部分的に残る体部と底部の境界付近は回転ナデが認められる。色調は淡灰色である。74は土師器・壺の口縁部片で、頭部から外湾しながら大きく広がる口縁の端部を尖り気味に納める。口縁端部の内面側は緩やかな稜が残る。内面頭部付近に部分的に横方向のハケ目が認められる。色調は橙褐色である。

⑦SK 10 (第13図、図版7 a)

SK 9の南に近接して存在する平面形不整円形の土坑である。南西側をごく一部近現代の溝によって壊されている。東西102cm×南北86cm、深さ18cmと浅い。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物 (第16図76) 土師器・壺 (76) 1点が出土している。

土師器・壺76は口縁から頭部にかけての小破片で、頭部からそれほど開かずに外上方に直線的に伸びた口縁の端部を尖り気味に納めている。口縁端部の内側に緩やかな稜が認められる。色調は表面は橙褐色で、胎土は淡灰黒色である。焼成はかなり良好である。SK 9の74と形態・色調がよく似ているが、口縁の開きが少なく直立気味である。内面頭部に横方向のハケ目がみられ、口縁内外面はナデ調整と考えられる。

⑧SK 11 (第13図、図版7 b・7 d)

上段平坦面の中央やや東側にあり、南側に存在する小土坑SK 12を壊している。平面形円形で、南北122cm×東西110cm、深さ51cmである。中央に径80cmのほぼ円形部分（1~6層、淡灰色粘質土・暗灰色砂質土・灰色粘質土・灰褐色砂質土）があり、これを取り巻くように裏込土（7・8層、暗灰色砂質土）が同心円状にめぐる。円形部分には桶の埋設が推定される。図示できる遺物の出土はない。

⑨ SK12 (第13図、図版7c・7d)

SK11に南接する小土坑で、SK11に大きく壊されている。平面形不整方形と考えられ、現存規模は東西80cm×南北62cm、深さ23cmと浅い。埋土は暗灰色砂質土・淡黄灰色粘質土(9・10層)である。

出土遺物(第16図77、図版10) 中央かなり浮いた状態で、瓦質土器・擂鉢(77)の口縁部片1点が出土している。内面下半が暗褐色であるが、ほかは灰色で、内面に横ナデのうちに縦位・斜位の擣目が刻まれている。口縁部端面は平坦で横ナデを施す。

⑩ SK13 (第13図、図版7e~7g)

上段平坦面の東半中央、SK11・12の東側2.4mに位置する。平面形梢円形で、北及び西側を中心には近現代の掘り込みによって部分的に壊されているが、現存規模は南北139cm×東西122cm、深さ65cmとほぼ原状を留めている。検出面において径1mほどの明確に色調が異なる同心円状の埋土が観察された。中央が淡灰色砂質土・黄灰色砂質土・灰色粘質土を主体とする桶部分(1~7層)、それを取り巻く裏込土(灰褐色砂質土・10層)である。底面近くで径82cm×80cm、現存高10cmの桶の底板と部分的に底部付近の側板が検出された。底板は幅16~20cm、厚さ5mm程度の板を4~5枚南北に並べていたが、側板の大きさは分からず。底板は側板下端から2~3cm上にある上げ底のものである。図示できる出土遺物はないが、スヌが頗著に付着した土師質土器・鍋と思われる小片や精良な灰白色の胎土の薄手の土器片などが出土しており、中世に遡る可能性がある。

⑪ SK14 (第13図、図版7h)

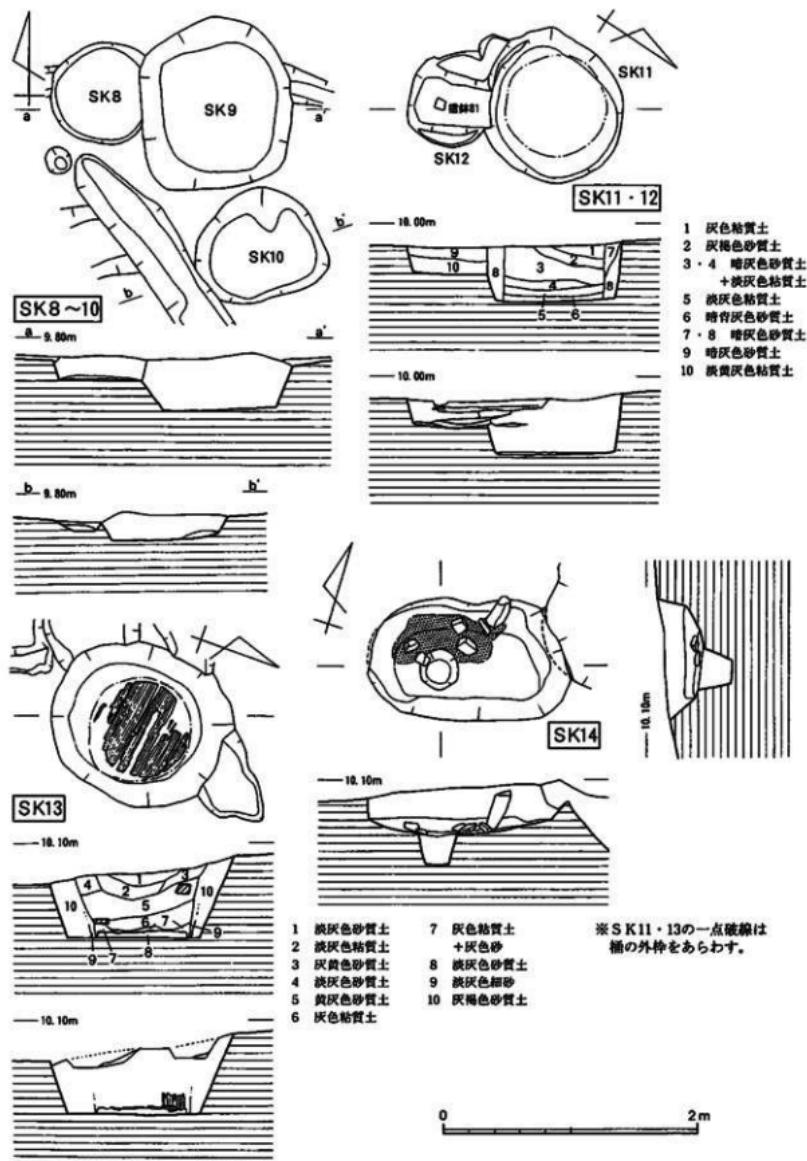
上段平坦面の東半、SK13の東60cmの至近距離に存在する土坑である。平面形はほぼ東西方向に長軸をもつ梢円形で、東側小口をSK15によって壊されている。現存規模は長さ160cm、幅94cm、深さ30cmで、底面は中央に向って緩やかに凹み、平坦ではない。底面中央には先行するピットが掘り込まれているが、坑底面北西側に偏して東西80cm×南北40cmの範囲に炭の広がりがみられ、10~20cm大の角礫数個が置かれていた。図示できる出土遺物はない。

⑫ SK15 (第14図、図版8a・8b)

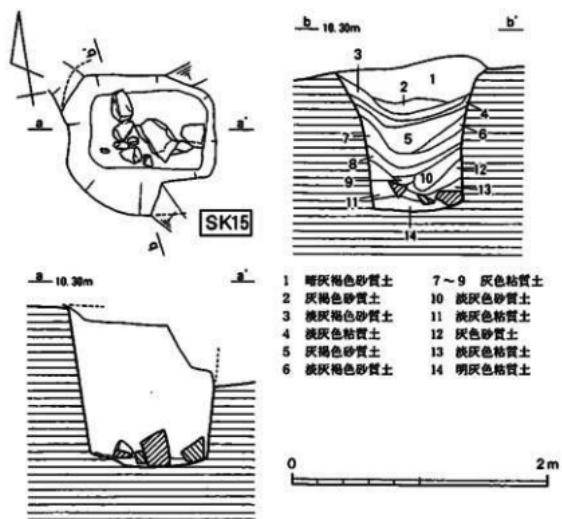
上段平坦面の東半にある土坑で、SK14の東側小口を壊している。また、その南側を中心後に後世の擾乱により大きく壊されている。平面形隅丸長方形で、現存規模は東西120cm×南北110cm、深さ113cmと深い。ほぼ東西方向に主軸がある。中央に向って凹む底面には10~30cm大の角礫10個程度がある。埋土は灰色・灰褐色の砂質土・粘質土が互層状に堆積している。

出土遺物(第16図78、図版10) 土師質土器・小皿(73)1点が下層から出土した。

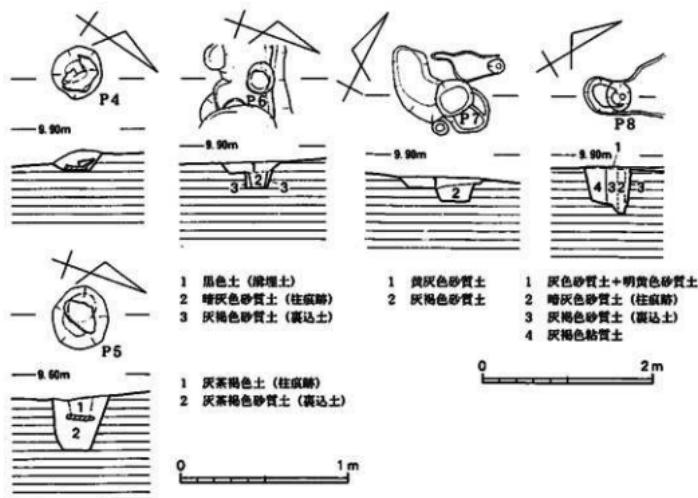
平底の底部から外上方に直線的に延びた体部が先細りになって口縁部を丸く納めている。底部回転糸切り離しで、体部外面下端に僅かに回転ナデが認められる。胎土は比較的精良で淡黄褐



第13図 G区土坑実測図(2) (1:40)



第14圖 G區土坑實測圖 (3) (1:40)



第15圖 G區柱穴實測圖 (1:30, 1:60)

色を呈するが、器表は淡橙色である。

(2) 単独柱穴（第15図）

上段平坦面には建物跡を構成しないピットが30~40個程度存在するが、ここではそれらのなかで内部から根石や遺物が出土したり、柱痕跡が認められたりした5個のピットを単独柱穴として取り上げる。根石が出土したP 5、遺物が出土したP 4・7、柱痕跡が認められたP 5・6・8がある。

① P 4（図版8c）

上段平坦面の西端に位置する。長径31cm×短径29cm、深さ10cmで、内部に土師質土器・甕の底部片が納められていた。

出土遺物（第16図79、図版10） 土師質土器・甕（79）の底部片1点が出土した。

79は土師質土器・甕の底部片で、外上方に直線的に延びる体部の下端から突出した総高台状を呈する。体部と底部の境には接合痕が明瞭に残り、体部下端に粘土の円板を接合して底部が形成されたことが明確に分かる。調整は、内底面から内面体部下端にかけて板状工具によると思われる粗い横ナデ、上方にかけて斜位あるいは横方向主体の浅いハケ目調整、体部外面は粗いナデ調整のうちに粗い斜位ハケ目で、外底面にはナデ調整がみられる。色調は黄白色で、胎土は比較的精良だが、全体に器壁の剥離が顕著である。

② P 5（図版8d・8e）

P 4の東2.4mに位置する。長径37cm×短径32cm、深さ32cmの規模で、中位付近に板状の根石（24cm×15cm、厚さ3cm。石材は黄白色の花崗岩系）が存在し、この根石上に径16~18cmの柱痕跡が認められた。出土遺物はない。

③ P 6（図版8f）

上段平坦面の中央北辺寄りで検出したピットで、東側に近接して埋桶遺構のSK 6が存在する。上面を近現代の溝で埋されている。長径37cm×短径32cm、深さ24cmで、径22~26cmの柱痕跡が認められた。出土遺物はない。

④ P 7（図版8g）

上段平坦面の中央やや西寄りで検出したピットで、不整形の浅い掘り込みによって上部を埋されている。埋土は灰褐色砂質土で、長径48cm×短径42cm、深さ20cmである。出土遺物はない。

⑤ P 8（図版8h）

上段平坦面中央やや東寄りで検出したピットで、SK 11・12の南西至近距離に位置する。長径

36cm × 短径29cm, 深さ52cmで、径10cmの柱痕跡が認められた。内部からは受部をもつ須恵器・杯身の小破片が出土している。上部を後世の掘り込みによって浅く攘されている。また、ピットの南側は埋土灰褐色粘質土のピット状の掘り込みを攘しているが、その関連性は不明である。

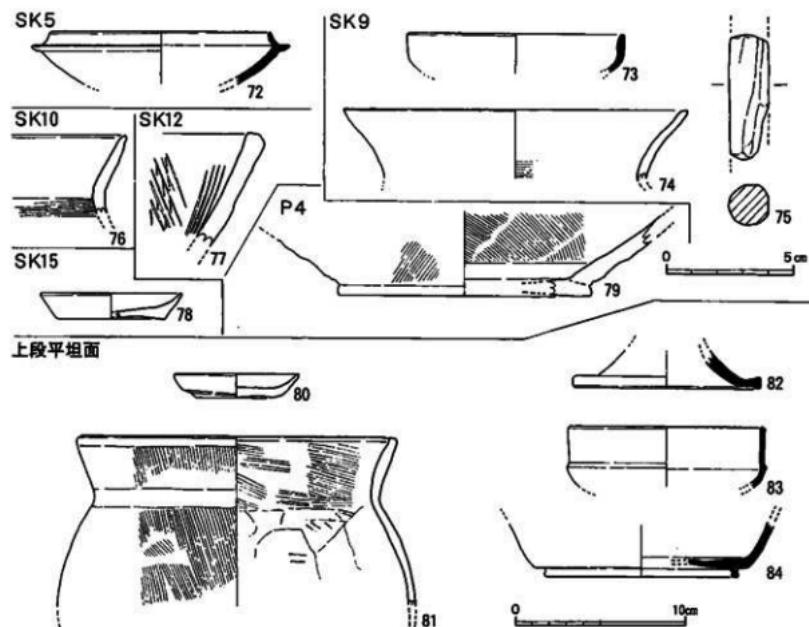
(3) 上段平坦面出土の遺物 (第16図80~84, 図版10)

造構に伴わないが、上段平坦面直上から出土した遺物として、土師質土器・小皿 (80), 土師器・甕 (81), 須恵器・高杯 (82), 同・杯身 (83・84) がある。

80は土師質土器・小皿で、やや部厚い平底の底部から内湾気味に外上方に延びる体部をもつ。底部回転糸切り離し、体部外面に回転ナデを施している。色調は淡黄褐色である。

81は土師器・甕で、丸みをもった体部からやや強く窄まり、頸部から開き気味に直立した口縁端部を平坦にしている。口縁端部内面は横ナデによって凹んでいる。調整は、内面が体部横方向のヘラケズリ、口縁部は横方向のハケ目、口縁端部の内外面は横ナデ、外面が口縁部はやや粗い斜位気味の縦位ハケ目、頸部が横ナデ、体部は密な斜位気味の縦位ハケ目を施している。口縁端面には凹線が1条施されている。焼成はかなり良好で、色調は橙褐色～淡黄褐色である。

82~84は須恵器である。82は高杯で、色調が表面は暗灰色、胎土が灰白色の精良な胎土であり、



第16図 G区出土遺物実測図 (3) (1:2, 1:3)

瓦器に近い胎土である。ラッパ状に強く開いた脚部の裾を水平に屈曲させ、端部をやや下方に肥厚させている。調整は、外面から脚裙部内面にかけて回転ナデが認められる。83・84は杯身と思われるもので、83はごく僅かな模を介して長く直立する立ち上がり部が付く。立ち上がり部内外面及び体部外面は回転ナデである。色調は暗青灰色である。84は底部の端からやや内方に断面方形の短い高台が貼り付けられている。端面は僅かに凹む。平底の底部から強く屈曲して、外上方に直線的に立ち上がる体部が付く。調整は、内面全体と体部外面は未調整、底部は回転ヘラ切りで、高台周辺には回転ナデが施されている。色調は表面が明灰色、胎土が灰白色である。

第1表 遺構一覧表 単位cm 括弧：現存値

遺構No	性 格	区	時 期	平 面 形	長 さ	幅	深 さ	出 土 遺 物
S X 1	不明	F	中世	不整方形(段状)	(512)	110	64	土師質土器(小皿3・碗4) 土師質土器(小皿5・杯6・碗7)、黒色土器(碗8)、瓦器(小皿9)、須恵器(杯10・小碗11)、白磁(碗12)、晉状土錐13、磁石14
S X 2	不明	F	古代～中世	不整形	(272)	(122)	41	
S K 1	土坑(窯)	F	中世	隅丸長方形	200	81	18	土師質土器(皿1・擂鉢2)
S K 2	土坑	G下	中世	隅丸方形	103	96	11	
S K 3	土坑	G下	中世以前	隅丸不整方形	103	90	19	
S K 4	土坑(桶)	G上	近世	円形	径118×110	46		
S K 5	土坑	G上	古墳後期か	不整円形	径62×54	40		須恵器(杯身72)
S K 6	土坑(桶)	G上	近世	円形	径100×95	41		
S K 7	土坑(桶)	G上	近世	円形	径78	41		
S K 8	土坑	G上	古代	円形	径81	17		
S K 9	土坑	G上	古代	隅丸方形	135×118	40		須恵器(皿73)、土師器(甌74)、晉状土錐75
S K 10	土坑	G上	古代	不整円形	径102×86	18		土師器(甌76)
S K 11	土坑(桶)	G上	近世	円形	径122×110	51		
S K 12	土坑	G上	中世	不整方形	(62) × (80)	23		瓦質土器(擂鉢77)
S K 13	土坑(桶)	G上	中・近世	梢円形	(139) × (122)	65		
S K 14	土坑	G上	中世以前	梢円形	(160) × 94	38		
S K 15	土坑	G上	中世	隅丸長方形	(120) (110)	113		土師質土器(小皿78)
S E 1	井戸	G下	中世	隅丸方形	143×140	227		土師質土器(皿17・碗18・杯19)
S D 1	溝	G下	中世	—	幅38～174	39		土師質土器(小皿20～22・皿23・杯24・25・碗26・27)

第2表 造物一覧表 単位cm *:復元値, 括弧:現存値

番号	器種①	器種②	出土状況・地点	口径	底径	高さ
1	土器	小瓶	F・SK1			*7.4
2	土器	瓶	F・SK1			
3	土器	小瓶	F・SK1	7.7	5.8	1.55
4	土器	瓶	F・SK1			
5	土器	小瓶	F・SK2	8.1	6.3	0.9
6	土器	瓶	F・SK2			
7	土器	杯	F・SK2			
8	土器	瓶	F・SK2	*14.0	*5.2	4.5
9	土器	瓶	F・SK2	*14.4	*5.8	5.0
10	土器	小瓶	F・SK2	9.8	7.0	1.9
11	須恵器	小瓶	F・SK2			
12	白磁	瓶	F・SK2	9.2	5.4	3.0
13	土製品	青瓷土罐	F・SK2			
14	石製品	砾石	F・SK2	長さ(5.0)	幅2.9×厚1.1	高さ1.2
15	土製品	砾石	F・SK2	長さ(18.0)	幅11.4×厚3.4	高さ4.8
16	土製品	砾石	F・SK2			
17	土製品	瓶	F・SK2			
18	土製品	瓶	G・SE1			
19	土製品	瓶	G・SE1			
20	土製品	小瓶	G・SD1	7.8	6.6	1.5
21	土製品	小瓶	G・SD1	*8.0	*6.4	1.7
22	土製品	小瓶	G・SD1	*8.4	*6.5	1.3
23	土製品	瓶	G・SD1	*10.0	*7.4	2.25
24	土製品	瓶	G・SD1			
25	土製品	杯	G・SD1	12.0	8.8	3.3
26	土製品	瓶	G・SD1			
27	土製品	瓶	G・SD1			
28	土製品	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*9.8	*7.1	4.5
29	土製品	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)	*6.7	*5.6	1.0
30	土製品	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)	10.5	5.9	3.7
31	土製品	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)	*10.8	*7.9	3.0
32	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*10.8	6.6	3.5
33	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*10.9		
34	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*11.8	*8.6	
35	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*12.4		
36	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*13.0		2.15
37	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*13.0		
38	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*3.6
39	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
40	土製品	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
41	須恵器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*25.0		
42	白磁	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	14.9	7.2	6.6
43	土器	陶灰土罐	G・下段平埴面(段上ノ層)	長さ(2.7)	幅2.0	厚さ1.4
44	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*7.6	*5.2	1.95
45	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	7.8	5.7	1.8
46	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	7.7	6.3	1.0
47	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*7.9	6.0	1.3
48	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	*8.6	*7.5	1.2
49	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)	9.4	7.2	1.7
50	土器	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)	*10.0	5.7	3.3
51	土器	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)	*10.4	*7.0	3.8
52	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			7.1
53	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*10.5
54	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*7.2
55	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*10.7
56	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*8.0
57	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			1.2
58	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			*8.3
59	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
60	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
61	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
62	土器	小瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
63	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
64	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
65	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
66	土器	瓶	G・下段平埴面(段上ノ層)			
67	土器	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)			
68	土器	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)			
69	土器	杯	G・下段平埴面(段上ノ層)			
70	土器	高杯	G・下段平埴面(段上ノ層)			
71	土器	土罐	G・下段平埴面(段上ノ層)			
72	土器	小瓶	G・SK5			
73	土器	瓶	G・SK6			
74	土器	瓶	G・SK7			
75	土器	瓶	G・SK8			
76	土器	瓶	G・SK9	長さ=4.9	幅1.6	
77	土器	瓶	G・SK10			
78	土器	瓶	G・SK12			
79	土器	小瓶	G・SK15			
80	土器	瓶	G・P4			
81	土器	瓶	G・下段平埴面			
82	土器	瓶	G・下段平埴面			
83	土器	瓶	G・下段平埴面			
84	土器	瓶	G・下段平埴面			

V ま と め

三太刀遺跡の今回の調査（F・G区）は、遺跡北東部の丘陵裾にある2枚の平坦面を対象に実施し、古代～近世の井戸・土坑・溝状遺構・ピットを検出した。F区やG区の下段平坦面で本遺跡の主体である中世の遺構を検出したが、G区上段平坦面では中世の遺構は少なく、近世を中心一部古代の遺構がみられた。以下において、出土遺物と遺構の検討を行い、まとめとしたい。

（1）出土遺物について

①遺物の検討 出土点数が少なく、大半が破片である。遺構に伴う遺物（33点）は報告遺物の4割未満で、多くはG区下段平坦面覆土からの出土である。ここでは出土遺物の大半を占める土器類を検討し、各遺構の時期について考えてみたい。土器類には、土師質土器・瓦器・瓦質土器・須恵器・須恵質土器・白磁があるが、土師質土器（小皿・杯・皿・碗），瓦器（皿・碗）が多い。

土師質土器・小皿（14点）は、SX1・SX2・SD3・SK15・G区下段平坦面覆土上層・同下層・G区上段平坦面から出土している。SD3（3点）とG区下段平坦面覆土下層（6点）以外はいずれも各1点の出土である。口径6.7～9.4cm（平均7.9cm），器高0.9～1.95cm（平均1.4cm），低平度（器高／口径）0.11～0.26（平均0.18）で、南北朝期を中心とする平成12（2000）年度調査のA～D区の小皿に較べて、口径が大きく、器高は低い。その結果、低平度の数値は低くなり、より低平である。底部切り離しは糸切り離しが主体で、ヘラ切りのものや丸みをもつものが一部にみられる。ヘラ切りのもの（3点）は下段平坦面覆土から、丸みをもつもの（1点）はSD1から出土した。形態的には平底の底部から直線的に外上方に延びるもののが大半を占める。薄手で丸底のSD1の21と、体部から若干突出気味の底部をもつ44・49、外湾気味の体部をもつ45・46など下段平坦面覆土下層出土の一群がやや形態的に違いがみられる。

杯（10点）はSX2・F区包含層・SE1・SD1・下段平坦面覆土上層・同下層から出土している（SD1・G区下段平坦面覆土下層が2点、同上層が3点、その他は各1点出土）。口径10.0～12.0cm（平均10.8cm），器高3.0～3.8cm（平均3.4cm），低平度0.28～0.37（平均0.32）で、比較的まとまっている。ただ、SE1・SD1出土のものは口径が大きく、器高が低いので、必然的により低平な器形になる。底部切り離しはいずれも糸切り離しである。形態的には、前者が平底の底部から外上方に直線的に体部が延びるものであるのに対し、後者は29・30・50など外反気味の体部がやや目立つ。

碗（7点）はSX2・SE1・SD1・下段平坦面覆土上層・同下層から出土している（SD1・G区下段平坦面覆土下層が各2点、その他は各1点出土）。計測可能なのはSX2・SD1・G区下段平坦面覆土下層の3点のみである。SX2出土の7は口径14.0cm，器高4.5cm，低平度0.32の大型の碗で、体部下半に緩やかな稜をもつ。高台は高くしっかりした、外開きに踏ん張る

もので、岡山県・鹿田遺跡出土遺物による山本悦世氏編年の鹿田Ⅲ-1期（12世紀末～13世紀初頭）を中心とする時期とみられる。SD1出土の27は丸底・無高台の深い器形で他の碗とは形態的に大きく異なっている。G区下段平坦面覆土下層出土の59は口径10.2cm、器高3.4cm、低平度0.33の小型の碗で、体部外面中位に緩やかな稜をもち、雑な高台を貼り付けている。草戸編年のⅡ期後半古段階（14世紀中葉）を中心とした年代を与えることができよう。

皿（16点）は、SK1・SE1・SD1・G区下段平坦面覆土上層・同下層から出土している（G区下段平坦面覆土下層が8点、同上層が5点、その他は各1点出土）。底部片が多く満足な法量値が求められるものが少ないが、口径10.0～15.1cm（平均11.8cm）、器高1.2～3.3cm（平均2.1cm）、低平度0.11～0.27（平均0.19）となり、A～D区出土の皿に較べて小型でより低平な器形であることが分かる。この傾向は下段平坦面覆土下層の53～55に特に顕著にみられる（平均値で、口径10.6cm・器高1.4cm・低平度0.13）。また、下段平坦面覆土上層の一群は法量的には口径12.2cmと平均値に近いが、形態的には他のものがいずれも平底で糸切り離しが主体であるのに対して、丸底気味でヘラ切りや未調整のものが多い。

擂鉢は2点（SK1・SK12から各1点）出土している。いずれも口縁部の小破片で前者（2）が土師質、後者（77）が瓦質の違いがあるが、形態的には類似しており、近い時期と思われる。ごく粗い縱方向主体の擂目、口縁部内面の横ナデ、端部は丸みが強く内面側の端面が平坦あるいは僅かに凹む口縁などの特徴から、15世紀後半～16世紀前半頃のものと考えられる。

瓦器は小皿2点・碗5点が、SX2、F区包含層、G区下段平坦面覆土下層から出土している。SX2（小皿）・F区包含層（碗）は各1点の出土で、残りはいずれもG区下段平坦面覆土下層からの出土である（小皿1・碗4）。小皿は似た器形だが、碗はやや内湾気味に開きながら立ち上がる低平なもの（64・65），直線的に体部が延びるもの（66），平底の底部からやや開きながら直立するもの（63）がみられる。64・65の碗は口径13.0～13.2cmと低平な器形で、調整は外縁付近に横ナデ、その直下に指頭押圧、下半は未調整、内面に横方向の粗いヘラミガキを施しており、和泉型のⅢ-3期（13世紀前半）を中心とする時期のものとみられる。

須恵器（12点）はSX2・G区下段平坦面覆土上層・同下層・SK5・SK9・G区上段平坦面から出土している。これらのうち、G区下段平坦面覆土下層の杯身67、SK5の杯身72は古墳時代後期の6世紀後半のものとみられる。また、G区下段平坦面覆土上層の碗41と同下層の杯68は久井町・熊ヶ迫1号窯跡に類例があり、平安時代中頃の10世紀後半～11世紀中頃とみられる。

黒色土器・碗が2点出土している。SX2の8とG区下段平坦面覆土上層の39で、いずれも内黒の黒色土器A類で森隆氏編年のVI期（10世紀中頃）を中心とする時期のものとみられる。

白磁・碗も底部片が2点出土している。SX2の12とG区下段平坦面覆土上層の42で、前者は直立する高い高台で高台外面上端まで施釉が及ぶ。後者はごく浅い削り出し高台で、体部内面下端の比較的高い位置に沈線が廻る。体部外面への施釉は下半以下には及んでいない。これらの碗の時期については、高台の形態や施釉の範囲などから12が大宰府出土資料による分類のV-3類（12世紀）、42が同じくIV-1～2類（12世紀）と考えられる。

②造構の時期 出土遺物から各造構の時期の検討を行なう。SX1, SE1, SD1, SK15はいずれもほぼ土師質土器・小皿を中心とし、ごくおまかに中世の造構と思われる。SK1・SK12は形態が類似する擂鉢が出土していることから、中世後期の後半とみられる。SX2は黒色土器A類の椀が出土する一方で、白磁・碗や高くしっかりした高台の土師質土器・椀、瓦器・小皿が存在することから、古代後期～中世前期頃の造構と考えたい。また、P4は土師質土器・大甕の存在から近世を中心とした時期の造構であろう。SK5は須恵器・杯身72が出土していることから古墳時代後期だが、上層からの出土であり、混入の可能性もある。SK9は須恵器・皿と土師器・甕が出土しており、ごく大まかに古代と捉えておきたい

なお、数量的に最も多くの遺物が出土したG区下段平坦面覆土については、土師質土器（小皿・杯・皿・椀）が主体で、古代後期の黒色土器（A類・椀）、須恵器（椀・杯）や中世前期の瓦器（小皿・椀）、白磁（碗）などを一定量含む。土師質土器については、小皿は底部ヘラ切りのものや体部から突出気味の底部、外湾気味の体部などがみられる。杯は口径が小さく器高が高いものが目立ち、体部は外反気味である。椀は吉備系椀を模した小型で雑な輪状高台をもつものがある。皿は口径・器高とも小さくより低平である。また、上層出土の皿はいずれも丸底気味でヘラ切り・未調整と特徴的である。これらG区下段平坦面覆土出土の土師質土器は、法量・形態的特徴など一部を除いてA～D区のものと類似しており、ほぼ同一の時期とみられる。よって、G区下段平坦面覆土の遺物は、土師質土器は14世紀の南北朝期を中心とした時期だが、古代後期～中世前期の遺物を一定量含むことから、概ね10～14世紀頃のものと考えることができよう。

（2）造構について

ここでは主として、①埋桶造構、②中世の造構、について検討したい。

①埋桶造構 土坑のうちで土層観察や部材の出土によって、桶を埋設したことが推定される5基（SK4・6・7・11・13）について検討する。

これら5基はいずれもG区の上段平坦面に存在する。SK13では桶の底板を中心とした部材がみつかっているが、ほかはいずれも土層観察により桶の埋設を推定したものである。桶はいずれも平面形は円形、大きさはSK7が径48cmと小さいが、ほかは径72～82cmとほぼ同一の大きさである。桶の高さ（深さ）は削平を受けていると思われる所以明確ではないが、裏込土の存在から現存値40～50cmである。SK7の埋設容器は小さく、内部から土師質土器の大型破片がある程度まとまって出土していることから、土師質の大型容器（甕）を埋設していた可能性がある。ほかの4基は容器の大きさや平面形がほぼ同じであることから、SK13と同じく桶を埋設していた可能性が高い。これら埋桶造構の機能については、墓（棺桶・早桶）、便槽、肥溜め、水槽などの可能性がある。棺に用いられる桶は径60cm、高さ55cm程度が標準的な大きさで、三次市・油免遺跡で出土したSK155・156でも底板の径が55～59cmであった。県内例で科学的分析によって便槽であることが明確になった例は少ない。北広島町・吉川元春館跡では精円形の掘方の中に2基の便槽が横に並んだ状態でみつかり、底径75cm、深さ58～67cmの桶を据えていた（SK161・162）。三

次市・油免遺跡SK113の便槽は底径93cm×91cmの桶を用いていた。また、土壤分析を経ていなくても、掘方内に並列して埋設された埋桶造構は便槽である可能性が高いと思われる。県内例でこのような例のうち、桶材が残るものでは、安芸高田市・郡山城下町遺跡SK14~16（底径75~95cm）、福山市・大塚土居前遺跡SB5内土坑（2基・底径100cm）などがある。便槽と考えられる埋桶造構の桶の大きさは、県内例では底径75~100cm、平均値88cmである。全国的には径50~60cm程度で、県内例は大きめである。なお、中近世の埋桶造構に埋設された桶（棺桶を除く）の大きさは主要な県内例によれば、平均径87cmである。

以上のように、本遺跡の埋桶造構は棺桶の可能性は低く、便槽の可能性が考えられる。これらの時期についてはいずれも出土遺物に乏しく明確ではないが、SK13の残存例による限りでは、いずれも複数の側板と底板を籠で固定した結構を用いていると思われる。11世紀に中国から伝来した結構が容器として本格的に普及するのは15~16世紀以降だとされている。また、県内例の埋桶造構の多くは近世を中心としており、16世紀以前の中世に含まれるものは、安芸高田市・寺之下遺跡SK9、北広島町・吉川元春館跡SK161・162、尾道市・尾道遺跡（長江一丁目07・08区）SK51・52、福山市・草戸千軒町遺跡SX3000・3092などごく僅かで、いずれも中世末期である。これらのことから考えても、本遺跡の埋桶造構は中世末~近世を中心とした時期のものと思われる。

②中世の遺構 F区のSK1・SX1・SX2、G区上段平坦面東端のSK12・SK15、同下段平坦面のSE1、SD1、SK2、P1~3などが中世を中心とした時期の遺構と考えられる。また、これらによって壊されているSK14やSK3なども中世の遺構である可能性が高い。これら中世の遺構の多くはF区とG区下段平坦面にあり、特に後者が中世の遺構面として広がりをもつことを示唆している。このG区下段平坦面の大半は調査区外に延びており、様相は不明確であるが、その海拔標高は8mで、A~D区の標高7~8mと等しく、同一の遺構面である可能性が高い。G区下段平坦面北側背後には1.2~1.3mの高さの段差があり、G区西端で北に2.8m「コ」字状に突出するもののほぼ西南西~東南東方向に直線的に延び、東端で緩やかに南方向に屈曲すると考えられる。この段差はあるいは三太刀山の内側の丘陵裾部に沿って「コ」字状に存在し、その内部にA~D区、G区下段平坦面の中世遺構面が広がっているものと思われる。

今回の三太刀遺跡F・G区の調査では、中世の遺構をはじめ、古代~近世の遺構や遺物がみつかった。特に、ごく部分的ではあるが、本遺跡の主体である中世集落跡の北東部分を検出できたことは、今後本遺跡の範囲や内容を解明していく上で貴重な調査成果をもたらしたと考えられる。

註

- (1) 山本悦世「古墳系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡』3 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- (2) 鈴木康之「土師質土器の編年」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』V 1996年
- (3) 白神典之「堺周辺の土師質擂鉢」「関西近世遺跡の在地土器の生産と流通」関西近世考古学研究会 1992年
- (4) 森島康雄・近江俊秀・尾上実「瓦器碗」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「熊ヶ迫第1号窯跡」「熊ヶ迫第1～3号窯跡」 1996年
- (6) 森隆「西日本の黒色土器生産」(上)・(中)・(下)『考古学研究』第37巻第2～4号 考古学研究会 1990年
- (7) 横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年
- (8) 平本嘉助「江戸時代人の身長と棺の大きさ」江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』 吉川弘文館 2004年
- (9) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「灰塙ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(IV) 2003年
- (10) 広島県教育委員会「吉川元春館跡- 第1次発掘調査概要-」 1994年
- (11) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「郡山城下町遺跡」 1993年
- (12) 建設省福山工事事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大塚土居前遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(II) 1984年
- (13) 大田区立郷土博物館編『トイレの考古学』 東京美術 1997年
- (14) 鈴木康之「日本中世における桶・樽の展開」「考古学研究』第48巻第4号 考古学研究会 2002年
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺之下遺跡」「寺之下・尾原」 1999年
- (16) 尾道市教育委員会「尾道- 市街地発掘調査概要-」 1980年
- (17) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡- 第33次発掘調査概要-』 1984年



F区



a 全景（調査前、北西から）



b 遺構検出状況（北西から）



c 西壁土層（南東から）



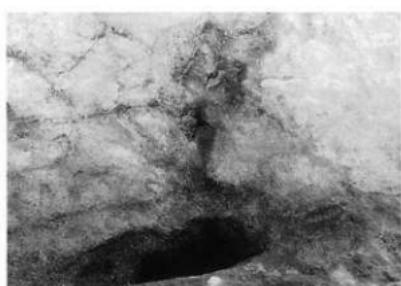
d SK1・SX1（南から）



e SK1 土層（南から）



f SX1 遺物出土状況（南から）



g SX2（南西から）



h 作業風景（北西から）

G区

a 全景
(調査後、西から)



b 同上
(調査後、東から)



c 西壁土層 (東から)





a 下段平坦面完掘状況
(北から)



b S E 1 (東から)



c 同上

G区



a 全景（調査前、北東から）



b 上段平坦面中央完掘状況（西から）



c 下段平坦面完掘状況（東から）



d SE 1直上土層（東から）



e SK 2（東から）



f SK 3（北から）



g SD 1土器出土状況（南から）



h 作業風景（下段平坦面、南から）

G区



a SK 4 (東から)



b SK 4 土層 (東から)



c SK 6 (東から)



d SK 6 土層 (西から)



e SK 7 (北から)



f SK 7 土層 (北から)

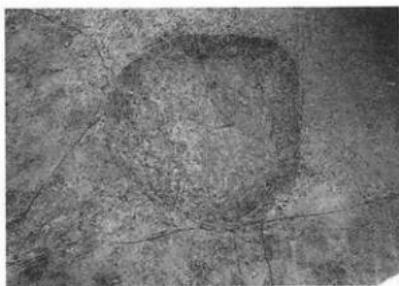


g SK 8 (西から)



h SK 9 (東から)

G区



a SK10 (西から)



b SK11 (東から)



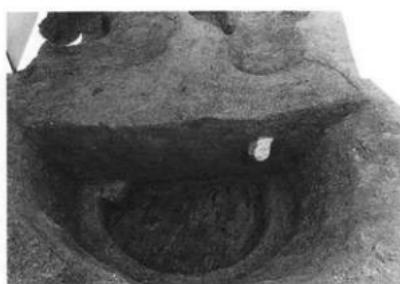
c SK12 (東から)



d SK11・SK12土層 (東から)



e SK13桶検出状況 (南から)



f SK13土層 (東から)



g SK13完掘状況 (東から)



h SK14 (南から)

G区



a SK 15 (北から)



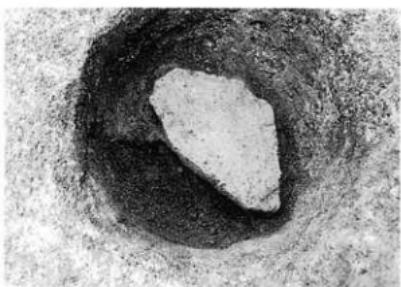
b SK 15土層 (東から)



c P 4 土器出土状況 (東から)



d P 5 土層 (東から)



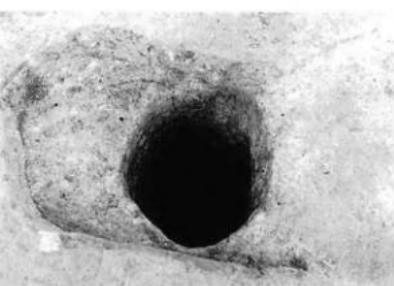
e P 5 根石 (東から)



f P 6 土層 (東から)



g P 7 (南から)



h P 8 (東から)

F区

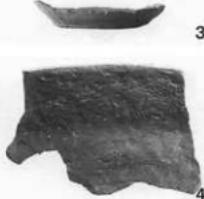
S X 1

S X 2

SK 1



2



3



5



8

包含層



15



11



12



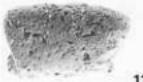
1



9



16



13



14



1

G区 下段平坦面

SE 1

SD 1



18



20



21



25



27

覆土上層



29



33



30



35



31



38



39



41



40

43

出土遺物（1）

图版10

覆土下层



44



50



61



64



45



51



70



46



57



47



59



71

上段平坦面

SK 5

P 4



72



79

SK 12

覆土



77



80



81

SK 15

出土遗物 (2)



78



82

報告書抄録

ふりがな	みたちいせき						
番名	三太刀遺跡(Ⅲ)						
副番名	東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	4						
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書						
シリーズ番号	第10集						
編著者名	梅本健治						
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室						
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49 TEL 082-295-5751						
発行年月日	西暦2005年3月18日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
三太刀遺跡	広島県 豊田郡本郷町本郷	34421	250 34° 24° 6°	133° 0° 3°	20040113 ～ 20040305	560	東本通土地 区画整理事 業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
三太刀遺跡	集落跡	古代 中世	井戸1基・土坑15基・ 性格不明の遺構2基・ 構造遺構1条	土師質土器（小皿・ 杯・皿・碗・鍋）, 須 恵器（杯身・碗）, 土 師器（壺・瓶）, 瓦器 (小皿・碗), 繩状土 鍋, 管状土鍋, 砧石	中世集落跡を認め る段の存在, 上段平 坦面における古代 遺構の存在, 中世 の下段平坦面（遺 構面）上に堆積する 厚い炭+焼土層。		

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第10集 三太刀遺跡(Ⅲ)	
東本通土地区画整理事業に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書(4)	
発行日	平成17(2005)年3月18日
編集	財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951
発行	財団法人 広島県教育事業団 〒730-0011 広島市中区基町4番1号 TEL (082)228-8451 FAX (082)228-8441
印刷所	鰐城印刷株式会社